

鶴塚古墳

2025

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

つ る つ か こ ふ ん
鶴塚古墳



2025

松山市教育委員会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター



巻頭図版 1. 鶴塚古墳全景（東より）



巻頭図版2. 調査地全景（真上より）



巻頭図版3. 石見型埴輪

序 言

鶴塚古墳は、松山平野の南側を東西に流れる重信川中流域右岸の平井町に所在します。平井町や周辺地域では、これまでに行われた数多くの発掘調査により縄文時代から中世にかけての集落の様相が徐々に明らかになってきたほか、北側の丘陵部には数多くの古墳の存在が知られています。

今回報告の鶴塚古墳は、民間開発(駐車場)に伴い実施した事前の発掘調査です。農地の一面にある高まりを地元では「鶴塚」と呼んでいたようですが、古墳なのか中近世の塚なのか実態が不明でした。調査の結果、鶴塚古墳が古墳時代後期の周壕を伴う前方後円墳であることが確認されました。埋葬施設は既に失われており確認することはできませんでしたが、周壕検出時に埴輪や須恵器など古墳関連の遺物が出土しました。また、古墳盛土の下から弥生時代の包含層が確認されたほか、弥生時代の遺構も確認されています。出土した遺物には松山市ではその出土が珍しい石見型埴輪、弥生土器では中国地方の土器などが見つかっています。

なお、発掘調査は開発によって失われる部分とし、開発の影響が及ばない部分については後世に残すため掘削は行っていません。今回の調査による成果は、松山平野における古墳時代後期の追加資料となるとともに、弥生時代の他地域との交流を考える上で重要な資料となるものです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書刊行にご協力いただきました地権者並びに周辺にお住まいの方々、関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和7年2月

松山市教育長

前田 昌一

例 言

1. 本書は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが平成30年2月26日～同年3月23日まで野外調査を実施した鶴塚古墳の報告書である。
2. 本書における遺構は、呼称名を一部について略号化して記述した。略号は以下のとおりである。
土坑：S K、溝：S D
3. 本書で使用した標高値(H)は海拔標高を示し、方位はすべて国土座標(世界測地系)を基準とした真北である。
4. 基本土層や遺構埋土の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(2004)に準拠した。
5. 屋外調査での写真は、相原浩二(以下、調査担当者という)、山内英樹(調査時、松山市教育委員会文化財課)が行い、遺物写真と図版作成は調査担当者、山内英樹と大西朋子が担当した。
6. 遺構の実測は調査担当者が、遺物の復元及び実測・製図は調査担当者と山内英樹の指示のもとに、山邊進也、越智田美紀、原富美、篠原綾が行った。
7. 挿図の縮尺は縮分値をスケール下に記した。遺物実測図は原則として、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪は1/4、石器は2/3とした。
8. 調査では下條信行(愛媛大学名誉教授)、前園實知雄(愛媛県埋蔵文化財センター)の諸先生方にご指導、ご教示を頂いた。また、写真撮影においては野口光比古氏(伊佐爾波神社宮司)にドローンによる撮影をご協力を頂いた。記して感謝申し上げます。
9. 測量に使用した屋外調査における国土座標測量は、山内晋氏に設置していただいた。
10. 本書の執筆・編集は調査担当者、山内英樹が担当し、越智田美紀、原富美の協力を得た。
11. 本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて保管されている。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経緯	3
第3節	調査・整理・刊行組織	6
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	7
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	7
第Ⅲ章	遺構と遺物	10
第1節	鶴塚古墳	10
第2節	その他の遺構と遺物	27
第Ⅳ章	まとめ	35

挿図目次

第1図	調査地位置図	1	第18図	朝顔形埴輪実測図	21
第2図	試掘トレンチ位置図	3	第19図	盾形埴輪実測図1	22
第3図	試掘トレンチ土層図1	4	第20図	盾形埴輪実測図2	23
第4図	試掘トレンチ土層図2	5	第21図	盾形埴輪実測図3	24
第5図	周辺地質図	7	第22図	石見型埴輪実測図	25
第6図	調査地周辺の主な遺跡	8	第23図	形象埴輪実測図	26
第7図	遺構配置図	11	第24図	SD1 測量図	27
第8図	ベルト土層図	12	第25図	SD1 出土遺物実測図	28
第9図	2区測量図	13	第26図	SK1・2・3・4 測量図	29
第10図	3区測量図	13	第27図	黒色土出土遺物配置図	30
第11図	土師器・須恵器遺物実測図1	14	第28図	黒色土出土遺物実測図1	31
第12図	須恵器遺物実測図2	15	第29図	黒色土出土遺物実測図2	32
第13図	円筒埴輪実測図1	16	第30図	黒色土出土遺物実測図3	33
第14図	円筒埴輪実測図2	17	第31図	黒色土出土遺物実測図4	34
第15図	円筒埴輪実測図3	18	第32図	その他出土遺物実測図	34
第16図	円筒埴輪実測図4	19	第33図	松山平野における後期前方後円墳・円筒埴輪	37
第17図	円筒埴輪実測図5	20	第34図	松山・風早平野における古墳後半期編年	39

表 目 次

表 1	調査地一覧……………2	表 7	出土遺物観察表埴輪 (4)…………… 44
表 2	出土遺物観察表土製品 (1)…… 40	表 8	SD1 出土遺物観察表土製品 …… 45
第 3	出土遺物観察表土製品 (2)…… 41	表 9	黒色土出土遺物観察表土製品 (1) …… 45
表 4	出土遺物観察表埴輪 (1)…………… 41	表 10	黒色土出土遺物観察表土製品 (2) …… 46
表 5	出土遺物観察表埴輪 (2)…………… 42	表 11	その他出土遺物観察表石製品… 46
表 6	出土遺物観察表埴輪 (3)…………… 43		

図 版 目 次

巻頭図版 1.	鶴塚古墳全景（東より）
巻頭図版 2.	調査地全景（真上より）
巻頭図版 3.	石見型埴輪
図版 1. 1.	鶴塚古墳下層出土弥生土器①
2.	鶴塚古墳下層出土弥生土器②（脚台付注口土器）
図版 2. 1.	調査前状況（南より）
2.	後円部墳丘土層精査状況（南西より）
3.	後円部墳丘土層近影（西より）
図版 3 1.	後円部墳丘ベルト土層遠景（西より）
2.	北側括れ部周壕検出状況（西より）
3.	前方部周壕内埴輪出土状況（北より）
図版 4 1.	調査区全景①（西より）
2.	調査区全景②（真上より）
3.	前方部地山上面検出遺構（西より）
図版 5 1.	SK1 検出状況（南西より）
2.	SD1 弥生土器出土状況（東より）
3.	後円部黒色土中出土の弥生土器（西より）
図版 6 1.	出土遺物①（須恵器・円筒埴輪）
図版 7 1.	出土遺物②（石見型埴輪・円筒埴輪・盾形埴輪・形象埴輪）
図版 8 1.	出土遺物③（SD1・黒色土）
図版 9 1.	出土遺物④（黒色土）
図版 10 1.	出土遺物⑤（黒色土・その他）

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

本調査は、松山市埋蔵文化財包蔵地外における駐車場造成工事に伴う緊急の事前調査である。

2017（平成29）年12月12日、申請者より松山市平井町甲3214番及び甲3209番3、甲3211番8、甲3213番7、甲3215番1、甲3216番1における埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。

申請地の現況は耕作地である。この申請地の一画には、「鶴塚」と呼ばれる高まりのある塚の存在が古くから知られている。現況は東西約20m、南北16mの範囲に高さ2.3mほどの楕円状の高まりをもち、西側に向かって緩やかな傾斜地となっている。この「鶴塚」はこれまでに「畑中の塚」として報告がなされており（溝渕1985、十亀2017）、「鶴塚」が前方後円墳の可能性があることも既に指摘されていた点は注目に値する。

以上の点から、文化財課では「鶴塚」の性格や時期、範囲などを確認するため試掘調査を行う事となった。試掘調査は公益財団法人文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター



第1図 調査地位置図

という。)が委託を受け実施した。

【参考文献】溝渕修三 1985「畑中の塚」『愛媛考古学』8号 愛媛考古学協会

十亀幸雄 2017「松山市平井所在の畑中の塚・鶴塚古墳」『愛媛考古学』8号 愛媛考古学協会

第2節 調査の経緯

1. 試掘調査

現状は円丘部を除き水田に利用され、かろうじて西方向に高まりが延びている。この「鶴塚」については、試掘前に地権者や地元の方々から話を伺っている。内容は以下のとおり。

「以前は西側の高まりがもう少し広がった」、「昔、相撲の土俵を造るのに黄色の土を削って、よく持って行った」、「戦後間もない時期に南側あたりから橙色の土器や、灰色の破片を見つけていた。資料は学校に持って行ったのでは?」、「戦後まもなく、このあたりに荷車が通るための道を造った際に不要な土砂を塚の上に盛り上げた。しかも、沢山の人が掘っているから、おそらく何も残ってないよ」、「耕作時や畦畔造作時に掘削していると、赤い土器がよく見つかった」など。

試掘調査は平成29(2017)年12月12日(火)～12月27日(水)の間に実施した。試掘トレンチは、現存する高まりの裾部から放射状にトレンチ9本(T1～T7、T9、T10)と墳丘確認のためのトレンチ4本(T8、T11～13)の合計13本を設定し、重機や人力でトレンチを掘削を行った(第2図参照)。その後、土層堆積状況の観察、遺構・遺物の有無の確認、記録写真撮影、測量を実施した。

遺構はT1～T7、T9トレンチで周壕を確認したほか、T8、T11～T13の下層部に墳丘盛土と思われる土層や、弥生時代の包含層などを検出した。遺物は遺構検出時に埴輪や須恵器、弥生時代の包含層からは弥生土器などが出土した。特に墳丘括れ部にあたるT4、T7トレンチでは周壕確認面ではあるが埴輪片が多量に出土している。

以上の結果、「鶴塚」は周壕の形状や出土遺物から古墳後期の前方後円墳である可能性が高く、残存する高まりは後円部の一部と確認されたものである。

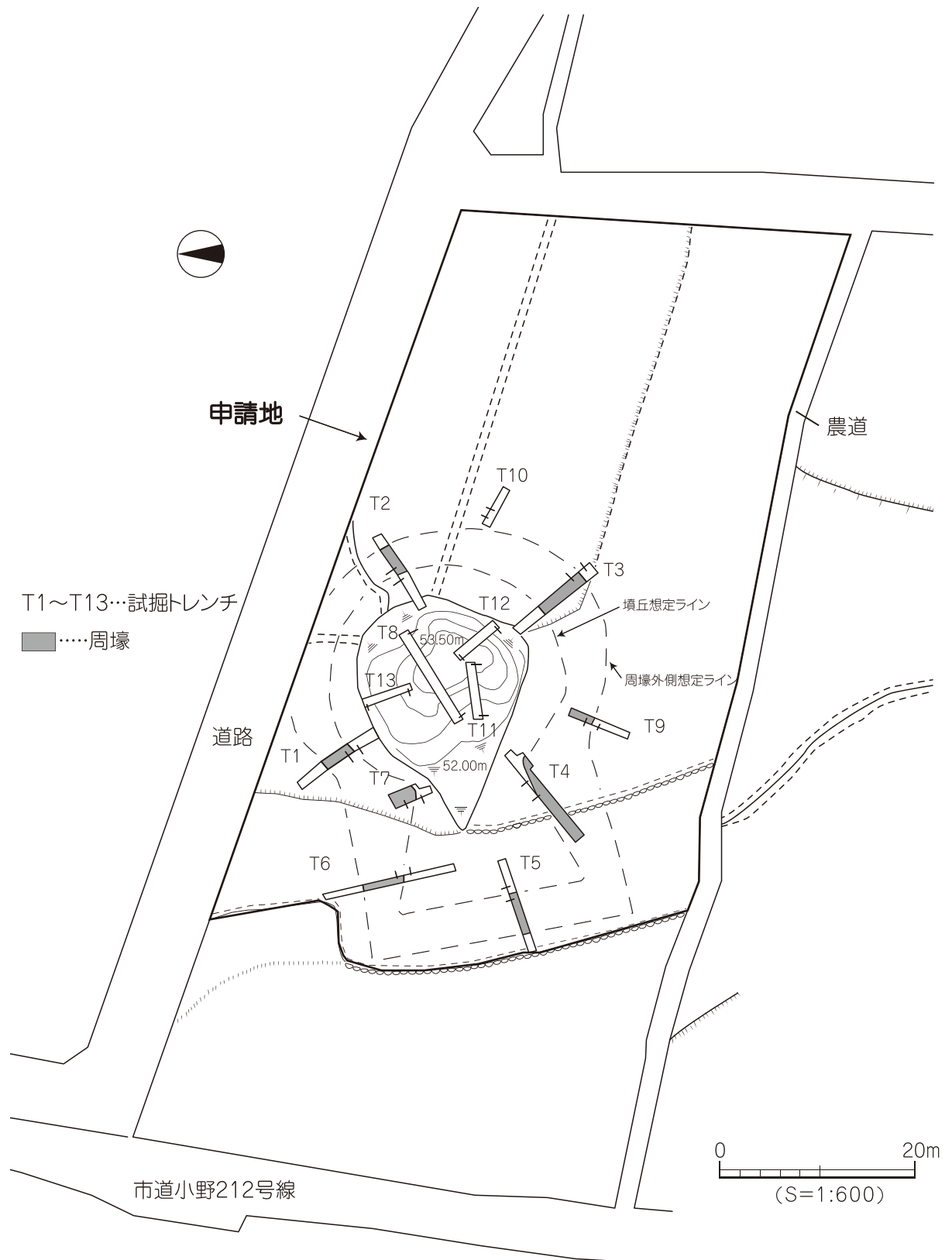
2. 本格調査

試掘調査の結果を受け、埋文センターと申請者及び関係者は発掘調査についての協議をおこない、工事によって失われる現存の高まり部分や、古墳規模の解明に最低限の必要な範囲について1区～3区を設定し記録保存のため発掘調査を実施することになった。発掘調査は、申請者と埋文センターとが委託契約を結び、遺跡名を「鶴塚古墳」として実施した。遺跡名、所在地、調査期間、調査面積は以下である。

表1 調査地一覧

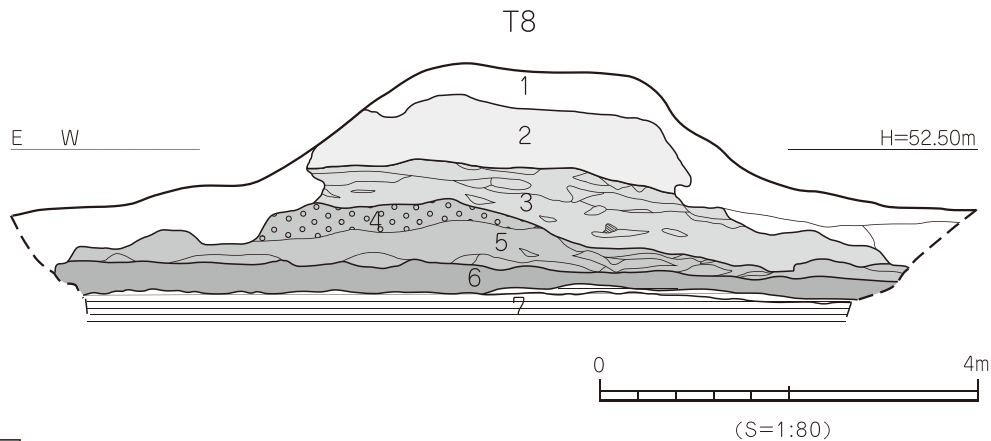
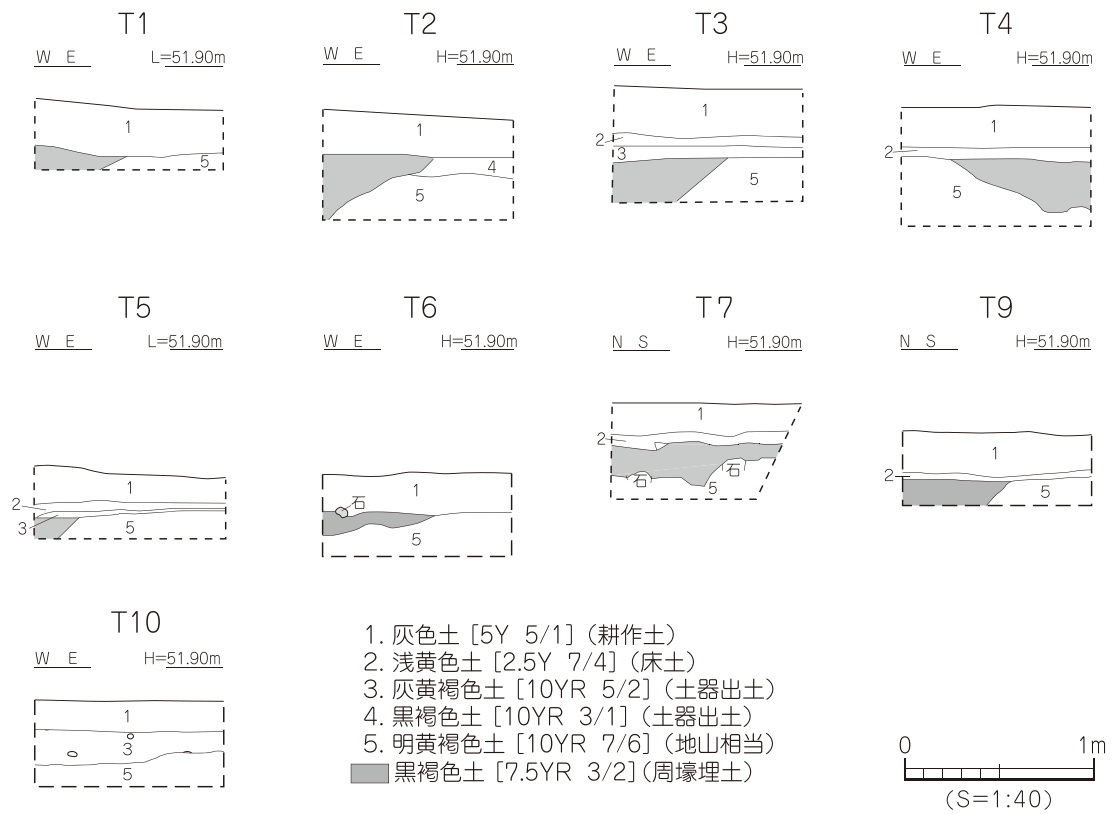
遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	調査面積
鶴塚古墳	松山市平井町甲3214番及び甲3209番3、甲3211番8、甲3213番7、甲3215番1、甲3216番1の各一部	2018(平成30)年2月26日(月)～ 同年3月23日(金)	約296㎡

調査の経緯



第2図 試掘トレンチ位置図

はじめに

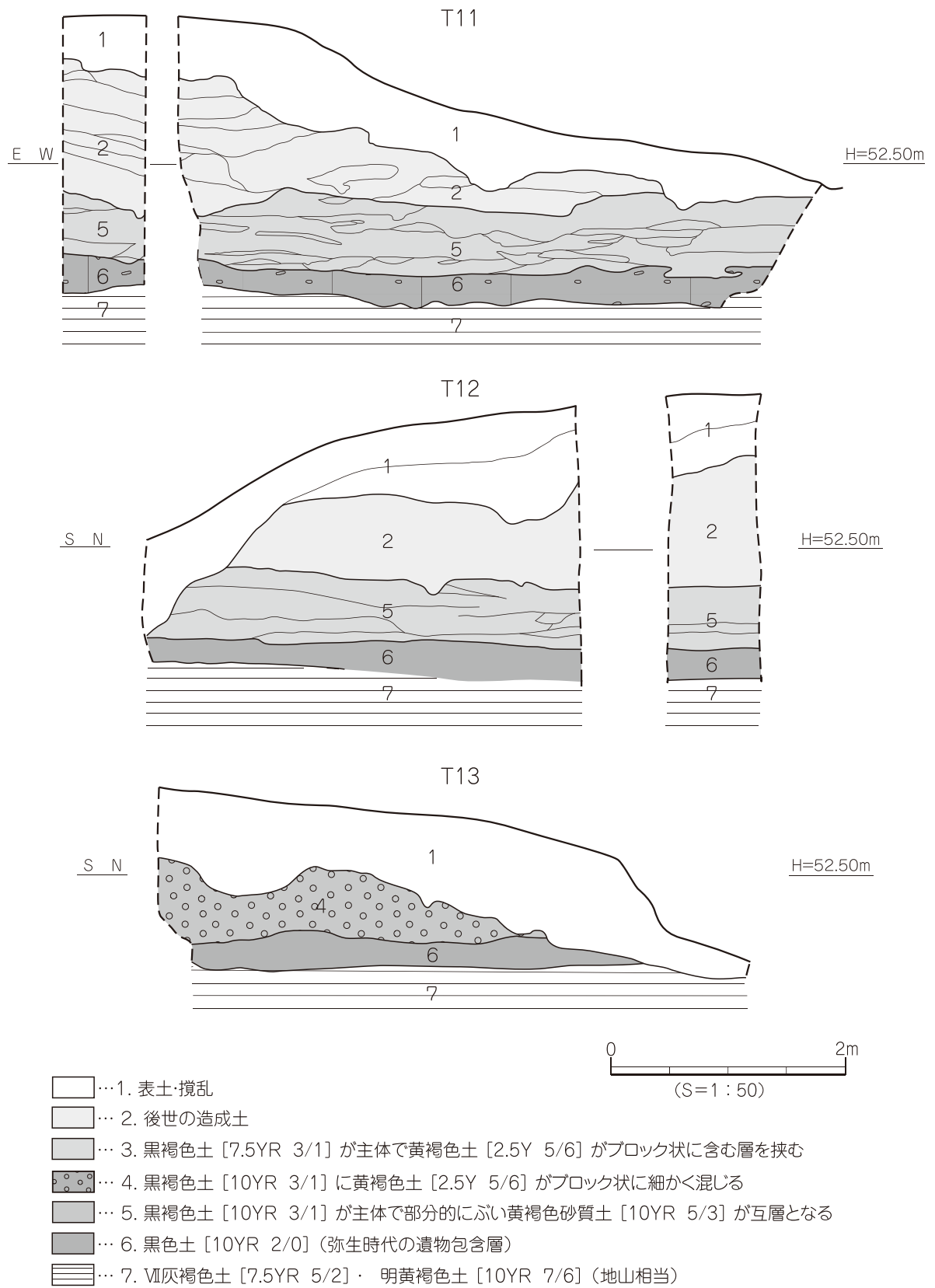


- … 1. 表土・攪乱
- … 2. 後世の造成土
- … 3. 黒褐色土 [7.5YR 3/1] が主体で黄褐色土 [2.5Y 5/6] がブロック状に含む層を挟む
- … 4. 黒褐色土 [10YR 3/1] に黄褐色土 [2.5Y 5/6] がブロック状に細かく混じる
- … 5. 黒褐色土 [10YR 3/1] が主体で部分的にぶい黄褐色砂質土 [10YR 5/3] が互層となる
- … 6. 黒色土 [10YR 2/0] (弥生時代の遺物包含層)
- … 7. VII 灰褐色土 [7.5YR 5/2] ・ 明黄褐色土 [10YR 7/6] (地山相当)

※土の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局
 監修『新版 標準土色帖』(2004)に準拠

第3図 試掘トレンチ土層図1

調査の経緯



第4図 試掘トレンチ土層図2

第3節 調査・整理・刊行組織

〔平成29年度 調査組織〕

(平成29年4月1日現在)

松山市教育委員会

	教育長	藤田 仁
事務局	局長	津田 慎吾
	次長	家串 正治
	次長	杉本 威
文化財課	課長	若江 俊二
	主幹	越智 茂樹
	主任	山内 英樹
		(調査担当)

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

	理事長	中山 紘治郎
事務局	局長	中西 真也
	次長	橘 昭司
文化振興部	部長	渡部 広明
埋蔵文化財センター		
	所長	村上 卓也
考古館館長		梅木 謙一
	主査	橋本 雄一
	主任	相原 浩二
		(調査担当)

〔令和6年度 整理・刊行組織〕

(令和6年4月1日時点)

松山市教育委員会

	教育長	前田 昌一
事務局	局長	横山 憲
	次長	野口 信隆
	次長	白石 秀一
	次長	好光 慎吾
文化財課	課長	岸 洋三
	主幹	楠 寛輝

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

	理事長	本田 元広
事務局	局長	横本 勝己
	次長	宇高 徹二
施設管理部	部長	仙波 義道
埋蔵文化財センター		
所長兼考古館館長		梅木 謙一
	主幹	吉岡 和哉
	主査	小玉 亜紀子
再雇用嘱託		相原 浩二
		(整理担当)
一般嘱託		山邊 進也
		(整理担当)

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 地理的環境

松山平野は、平野のほぼ中央部を西流する重信川と、その支流によって形成された扇状地や氾濫原、三角州性堆積物および海浜堆積物などで構成される肥沃な沖積平野である。

鶴塚古墳の位置する小野地域は松山平野東部に位置し、重信川の支流である小野川、悪社川、内川によって形成された扇状地が広範に分布する地域である。鶴塚古墳は、この小野川右岸の平井町標高約52m～53mに位置する。

第2節 歴史的環境

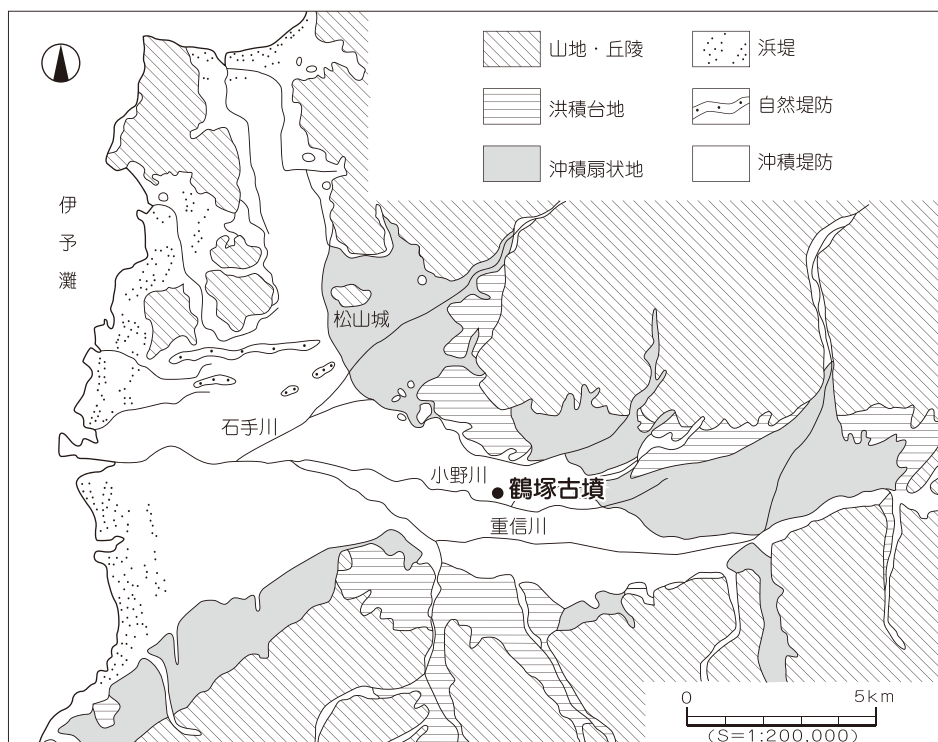
ここでは、小野・平井地区のほか西方の来住久米地区に所在する遺跡の概要を時代別に概観する。

旧石器時代

松山平野内では旧石器時代の遺構は確認されていない。遺物はいずれも採集資料や単独出土である。この地区では五郎兵衛谷古墳や久米窪田Ⅴ遺跡出土の角錘状石器や、久米山田池で採取されたナイフ形石器が知られている。

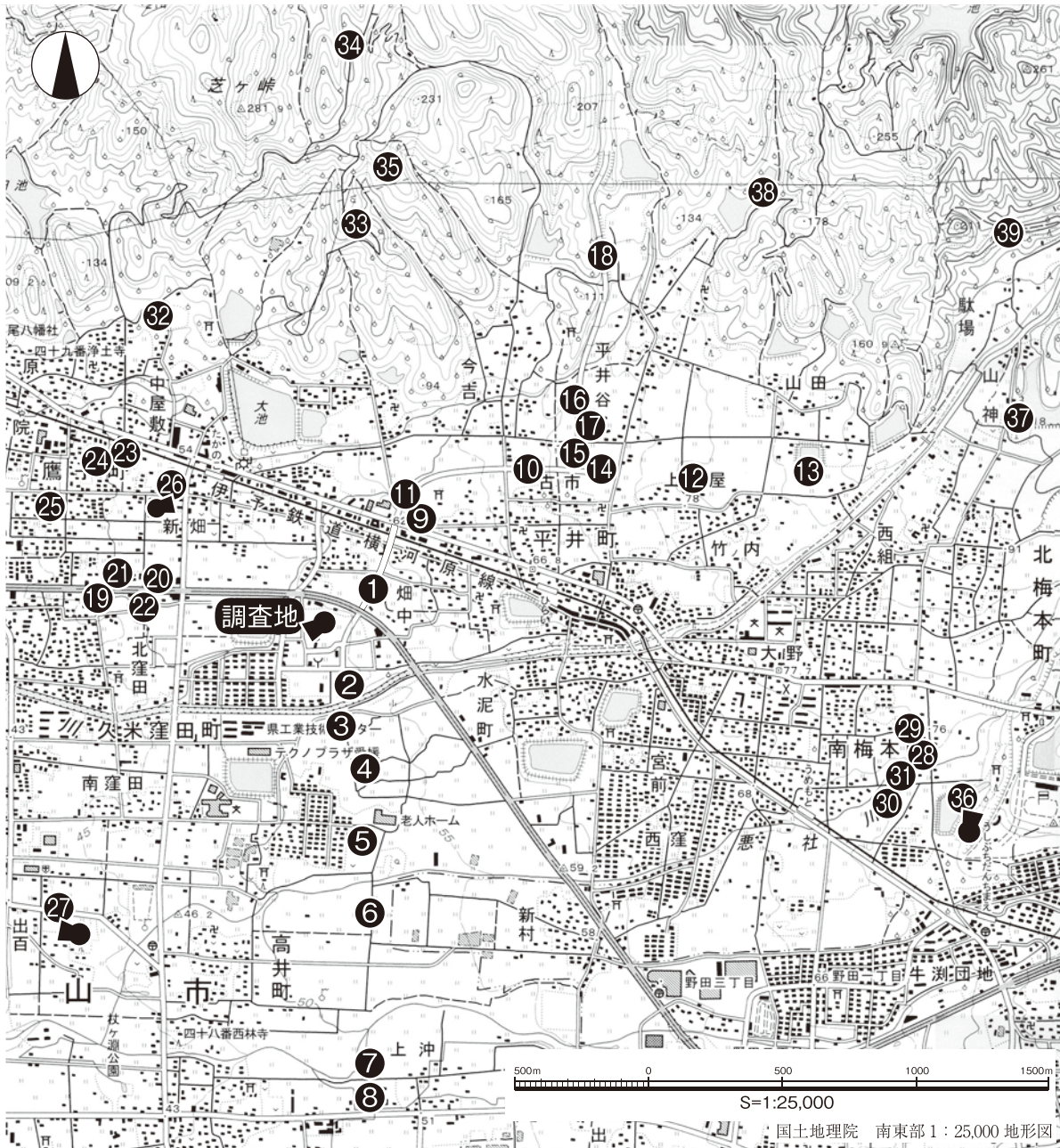
縄文時代

古市遺跡2次調査では、晩期の土器が出土した土坑が報告されている。久米窪田森元遺跡では後期に時期比定される一括性の高い土器群が土坑より出土し、久米窪田Ⅰ遺跡では竪穴建物より同時期の



第5図 周辺地質図

鶴塚古墳



- | | | | |
|--------------|---------------|----------------|---------------|
| ① 平井遺跡 3～9 次 | ⑪ 下苅屋遺跡 3 次 | ⑳ 久米窪田森元遺跡 1 次 | ㉑ 南梅本上方遺跡 2 次 |
| ② 平井遺跡 2 次 | ⑫ 上苅屋遺跡 3 次 | ㉒ 久米窪田古屋敷 C 遺跡 | ㉒ 五郎兵衛谷古墳 |
| ③ 水泥遺跡 1 次 | ⑬ 上苅屋遺跡 4 次 | ㉓ 鷹子新畑遺跡 2 次 | ㉓ 檜山峠 7 号墳 |
| ④ 水泥遺跡 2 次 | ⑭ 古市遺跡 1 次 | ㉔ 鷹子新畑遺跡 3 次 | ㉔ 芝ヶ峠 1 号墳 |
| ⑤ 水泥遺跡 3 次 | ⑮ 古市遺跡 2 次 | ㉕ 鷹子遺跡 1 次 | ㉕ かいなご 3 号墳 |
| ⑥ 高井遺跡 1 次 | ⑯ 五楽遺跡 1 次 | ㉖ タンチ山古墳 | ㉖ 播磨塚天神山古墳 |
| ⑦ 南高井遺跡 2 次 | ⑰ 五楽遺跡 2 次 | ㉗ 波賀部神社古墳 | ㉗ 葉佐池古墳 |
| ⑧ 南高井遺跡 3 次 | ⑱ 五楽遺跡 3 次 | ㉘ 南梅本長広遺跡 1 次 | ㉘ 茨谷窯址 |
| ⑨ 下苅屋遺跡 1 次 | ㉑ 久米窪田 I 遺跡 | ㉙ 南梅本長広遺跡 2 次 | ㉙ 駄馬姥ヶ懐窯址 |
| ⑩ 下苅屋遺跡 2 次 | ㉒ 久米窪田 III 遺跡 | ㉚ 南梅本上方遺跡 1 次 | |

第 6 図 調査地周辺の主な遺跡

遺物が出土している。久米高畑遺跡 36 次調査の円形竪穴建物跡より、晩期中葉の土器群が出土し、同 26 次・35 次調査では同時期の土坑が出土している。

弥生時代

この地区では、前期末～中期初頭の集落遺構や遺物の出土が多く注目され、古市遺跡 2 次調査や五楽遺跡より当該期の土坑群が検出されている。久米地区では、久米高畑遺跡 23 次・25 次調査より環濠と推測される複数の大溝が検出されているほか、来住台地上に広く展開する同時期の遺跡からは多数の土坑が確認されている。中期の遺構・遺物の検出例は少なく、久米地区にある久米窪田古屋敷 C 遺跡より中期後半の土器が出土する大溝が報告されている。そのほか、来住廃寺 15 次調査では同時期の土器が投棄された状態で出土している。後期では集落の広がりが見解されておらず、遺跡が点在する。久米地区にある久米片廻り遺跡では、円形竪穴建物跡より終末期の土器の外に鉄鏃が出土している。また、久米窪田 I～V 遺跡や来住廃寺遺跡において後期の遺構・遺物が確認されている。

古墳時代

小野地区では、発掘成果により古墳時代集落の様相が見解されつつある。下苅屋遺跡 1～3 次調査では、5 世紀末～7 世紀にかけての竪穴建物や土坑、掘立柱建物跡などの集落関連遺構が多数確認されている。これらの集落遺構は、生焼けや焼け歪みの須恵器が出土することから、小野地区北方の丘陵部にある松山平野東部古窯址群からの中継地点あるいは集積地として機能していた可能性が高いと考えられている。来住・久米地区では開遺跡 1 次・2 次調査地より 5 世紀末～6 世紀前半の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が検出され、竪穴建物の変遷や、竪穴建物から掘立柱建物への移行が報告されている。

一方、小野・平井地区にある丘陵上には古墳時代中期～後期にかけての築造とされる古墳が多数分布している。このうち、前方後円墳は鶴塚古墳の周囲 2.5km 以内に 4 基が存在する。北 1.7km の丘陵部には松山峠 7 号墳があり、5 世紀末の前方後円墳で、松山平野における渡来系竪穴式石室の導入を知る貴重な資料である。後期では東 2.5km の台地縁辺部に播磨塚天神山古墳があり、平地部では南西 1.5 km に波賀部神社古墳、北西 2.45km には二つ塚古墳などの大・中型前方後円墳が存在する。このほか、国史跡となった葉佐池古墳や芝ヶ峠古墳群、かいなご古墳群、播磨塚古墳群など小規模な円墳または方墳群が存在する。

古代

小野地区には松山平野東部古窯址群があり、10 基以上の窯址が確認されている。主なものは駄馬姥ヶ懐、悪社谷、茨谷窯址などで、出土遺物も 6 世紀後半から 8 世紀後半までの操業とされている。久米地区では来住台地上に展開する久米官衙遺跡や来住廃寺跡などがあり、調査からは回廊状遺構や評定院、さらには正倉の発見など古代の松山平野を知るうえで大きな成果が得られている。

中・近世

小野地区では下苅屋遺跡 2 次調査で中世の鋤址や溝などの生産関連遺構が検出され、当地が生産域として利用されたことが明らかになっている。来住・久米地区では来住台地東部、鷹子遺跡周辺で集落遺構が確認されている。近世では下苅屋遺跡 3 次調査において江戸時代前期の墓、さらに来住廃寺 15 次調査では土壇墓が報告されている。

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 鶴塚古墳

(1) 調査方法及び調査区設定

発掘調査は開発に伴い削平される既存の残丘部を中心とし、削平が及ばず保護可能な箇所については古墳規模の確認を目的として1区～3区に分けて掘削を行った。1区は残丘部を含む後円部～括れ部、2区は前方部南隅角部、3区は主軸方向の前方部端および周壕部である。なお、周壕部については検出を主目的としたため、周壕底まで掘削はせず検出面のみの掘削に留めている。

(2) 墳丘及び層序

試掘調査および本調査の結果、検出された周壕部境界を基準とすると、墳丘主軸を東西方向より約20°北に振り、墳長34.5 m、後円部径21.0～23.0 m、括れ部幅11.0 m、前方部長13.5 mを測る前方後円墳であることが確認された。前方部前面幅は2区検出の隅角を参考に、主軸より反転復元すると概ね20 m前後と推定される。

また、地山相当層（黄褐色土）の整形面を観察すると、後円部南側の周壕部にやや浅い箇所があり、陸橋状を呈すると思われる。その目的としては、墳丘盛土及び埋葬主体構築のため周壕を往来する作業道を可能性の一つとして想定したい（墳丘構築後は削平?）。

墳丘部は田畑の開墾・削平等により前方部は地山整形面を除き築造当時の姿を残していない。後円部については調査当時も盛土の高まりを留めていたことから、墳丘構築方法の解明を目的として1区・後円部残丘の調査を進めた。その結果、現在「塚」として残る高まりの大半は開墾に伴い削平された後、再度盛り上げたものであった可能性が高い（交差主軸ベルト中の1・2層）。さらにその下層である4層（黒褐色と黄褐色の交互土層）は、礫や攪乱土も多く混じることから、残存する墳丘築造当時の盛土層はごく僅かであると判断する。

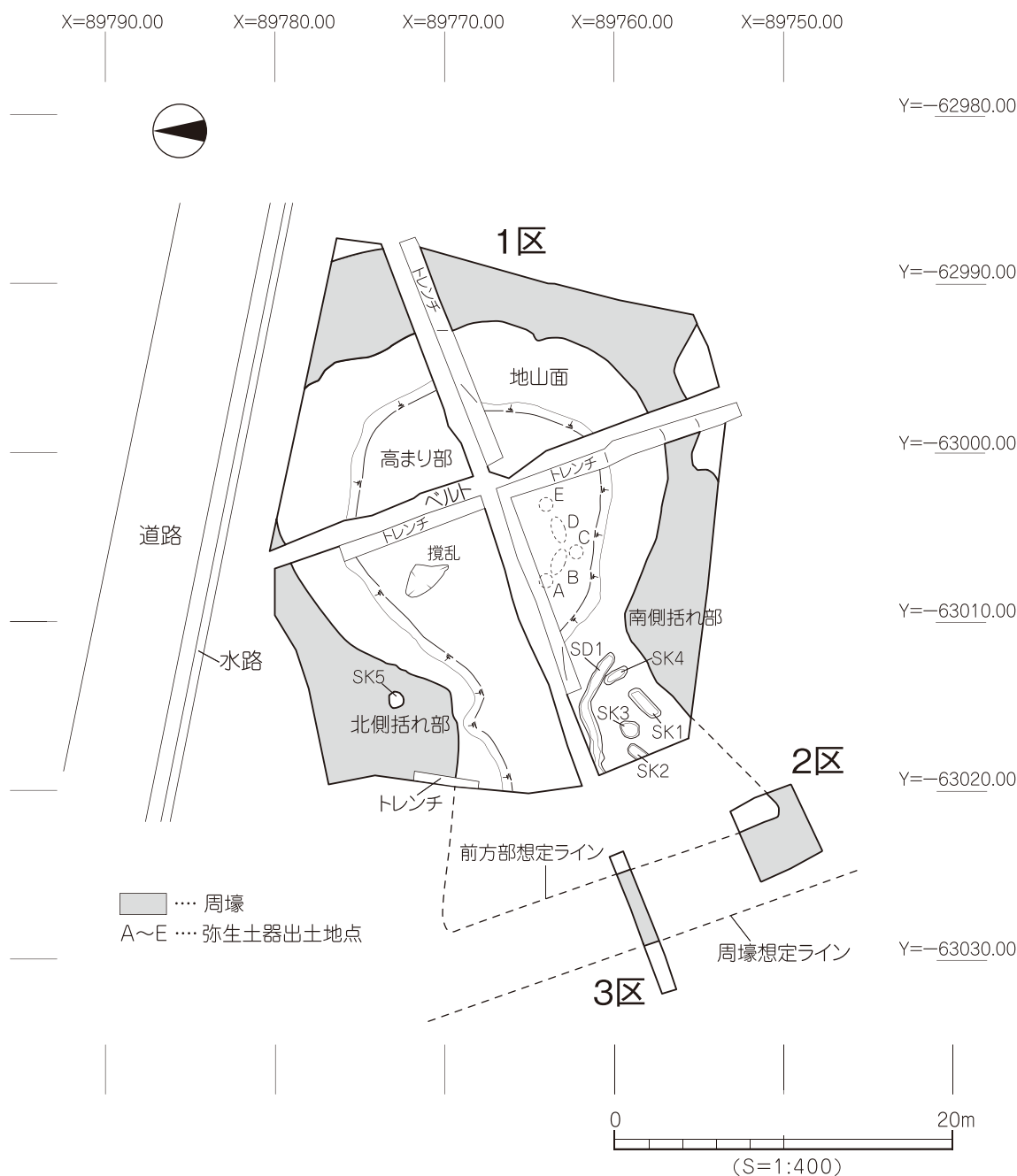
地山相当層と考える6層（明黄褐色土）上面には、弥生時代中期の土器片を含む遺物包含層である5層（黒色土）が安定して堆積しており、鞍部から前方部にかけて攪乱を受けた痕跡もないことから、墳丘築造当初、5・6層を成形して前方後円墳の基本平面形を決定していたことが分かる。

(3) 埋葬主体

1区・後円部残丘の調査目的の一つに、埋葬主体の検出があった。後述する各種埴輪・須恵器の年代比定を根拠に横穴式石室の可能性を想定し、交差する主軸ベルト及び掘削平面の精査を併行しながら確認を進めたが、結果、埋葬主体部の確認には至らなかった。

おそらく、盛土削平や攪乱（盗掘?）等により石室石材を含め完全に抜き取り（破壊）されたものと考えられる。僅かに後円部南側の周壕内や4層中で拳～人頭大の亜角礫が散見されたが、その一部ではないかと想像する。また、主体部構築時に掘削されるはずの墓壇が弥生包含層（5層）や地山相当層（6層）には確認できない点から、盛土層上面（4層より上）のレベルに墓壇底面が設定されていた可能性も考えておく必要がある。

遺構と遺物

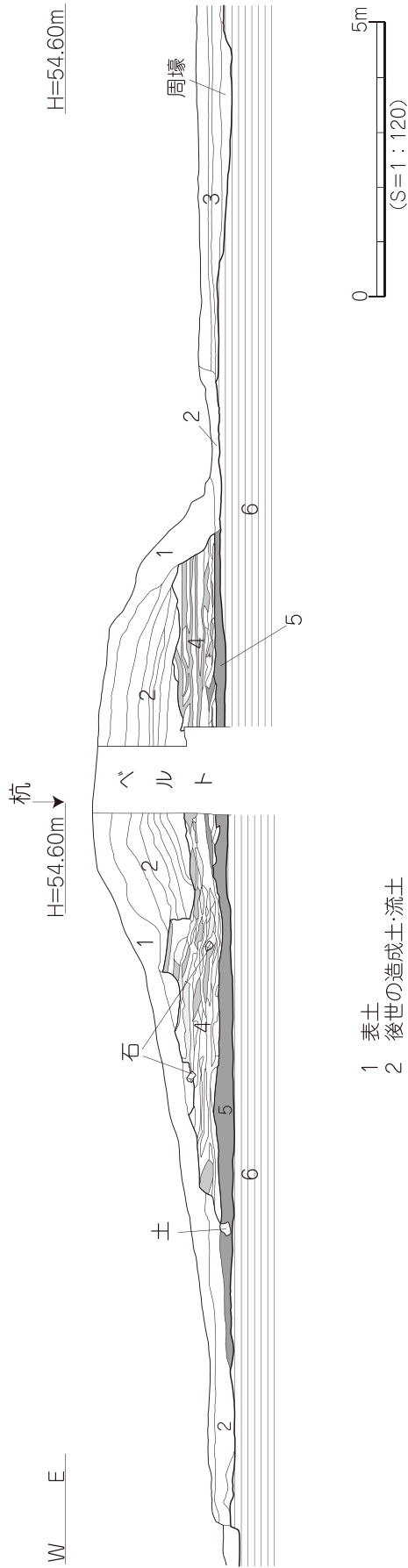
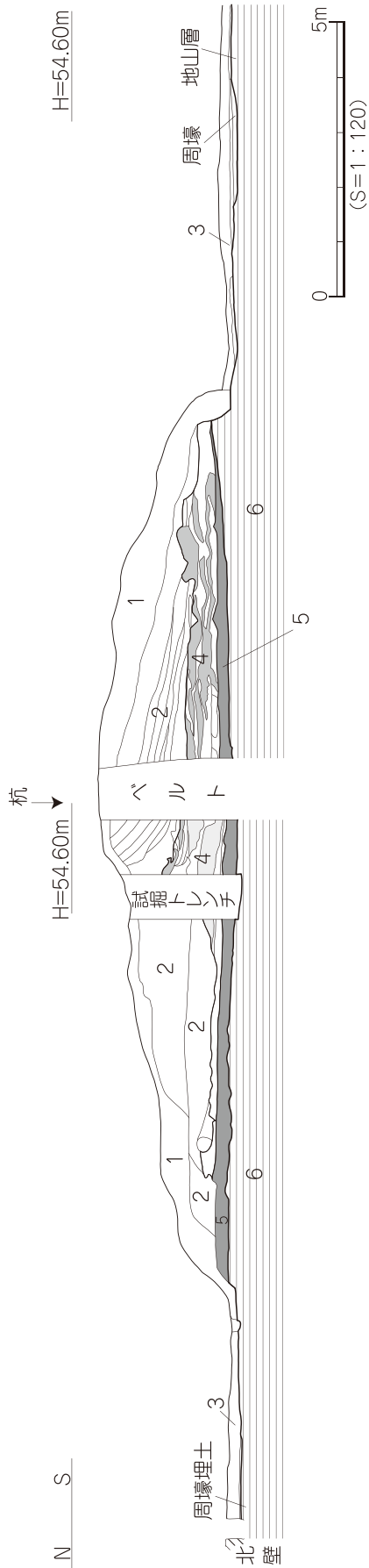


第 7 図 遺構配置図

(4) 周壕

墳丘を巡る周壕は、試掘調査および本調査の結果、古墳築造時には全周していたと思われる。周壕幅は1.8～5.3 mで、墳丘括れ部と合わせるように周壕もやや括れた形状となる点で特徴的である。また、周壕底までの深さについては検出のみで掘削停止しているため、現状では不明だが、南北括れ部が最深（試掘T 4・7）で、前方部がやや浅め（2・3区）と想定される。

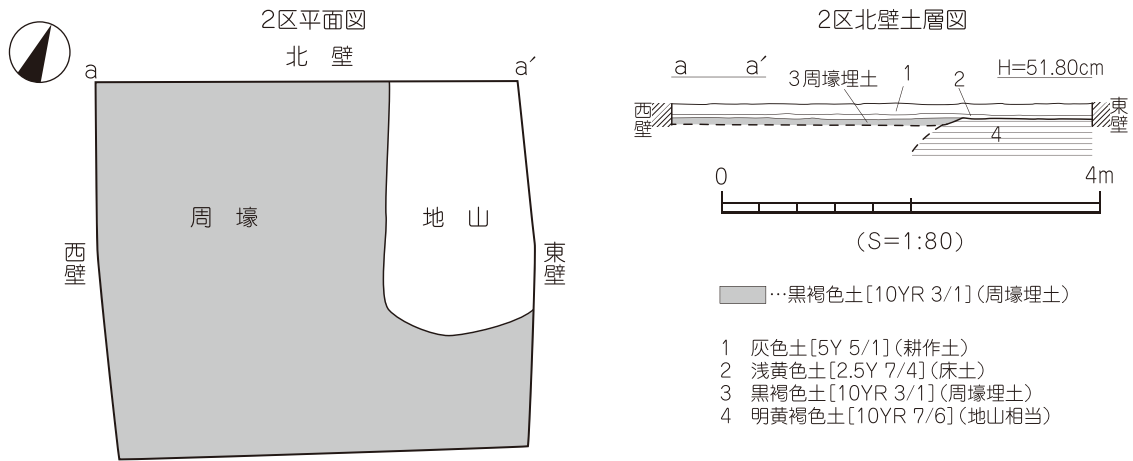
また、周壕の平面検出時より多量の各種埴輪や須恵器等が確認されたが、北側括れ部では装飾付須



- 1 表土
- 2 後世の造成土・流土
- 3 近・現代の水田層
- 4 黒褐色土[10YR 3/1]が主体で黄褐色砂質土[10YR 5/3]が互層となるほか、黄褐色土[2.5YR 5/6]がブロック状に細かく混じる(墳丘盛土を一部含む)
- 5 黒色土[10YR 2/0] (弥生時代の包含層)
- 6 灰褐色土[7.5YR 5/2]、明黄褐色土[10YR 7/6] (地山相当)

第8図 ベルト土層図

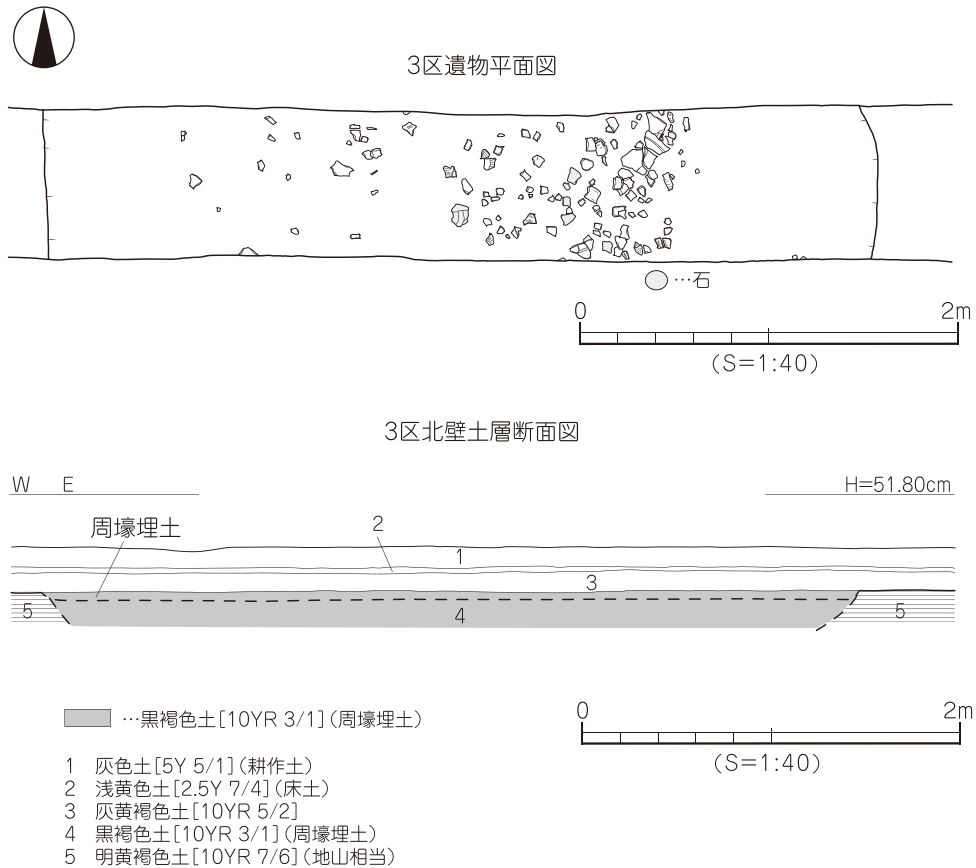
鶴塚古墳



第9図 2区測量図

恵器や石見型埴輪などの特徴的な器種に加え、やや大型の石材や円礫なども混在していた。おそらく墳丘上の構築物（埋葬主体か）の転落・攪乱に伴い築造後時間をあまり隔てずに括れ部へ転落した可能性も考えられる。

3区では前方部前面の周壕内に盾形埴輪片がまとまって検出された。3区は周壕部の境界確認が主目的の限定的な調査であるため詳細は不明であるが、括れ部付近の「祭祀的な」色合いとは異なり、前方部前面に盾形埴輪が集中的に配置されていた可能性も否定できない。



第10図 3区測量図

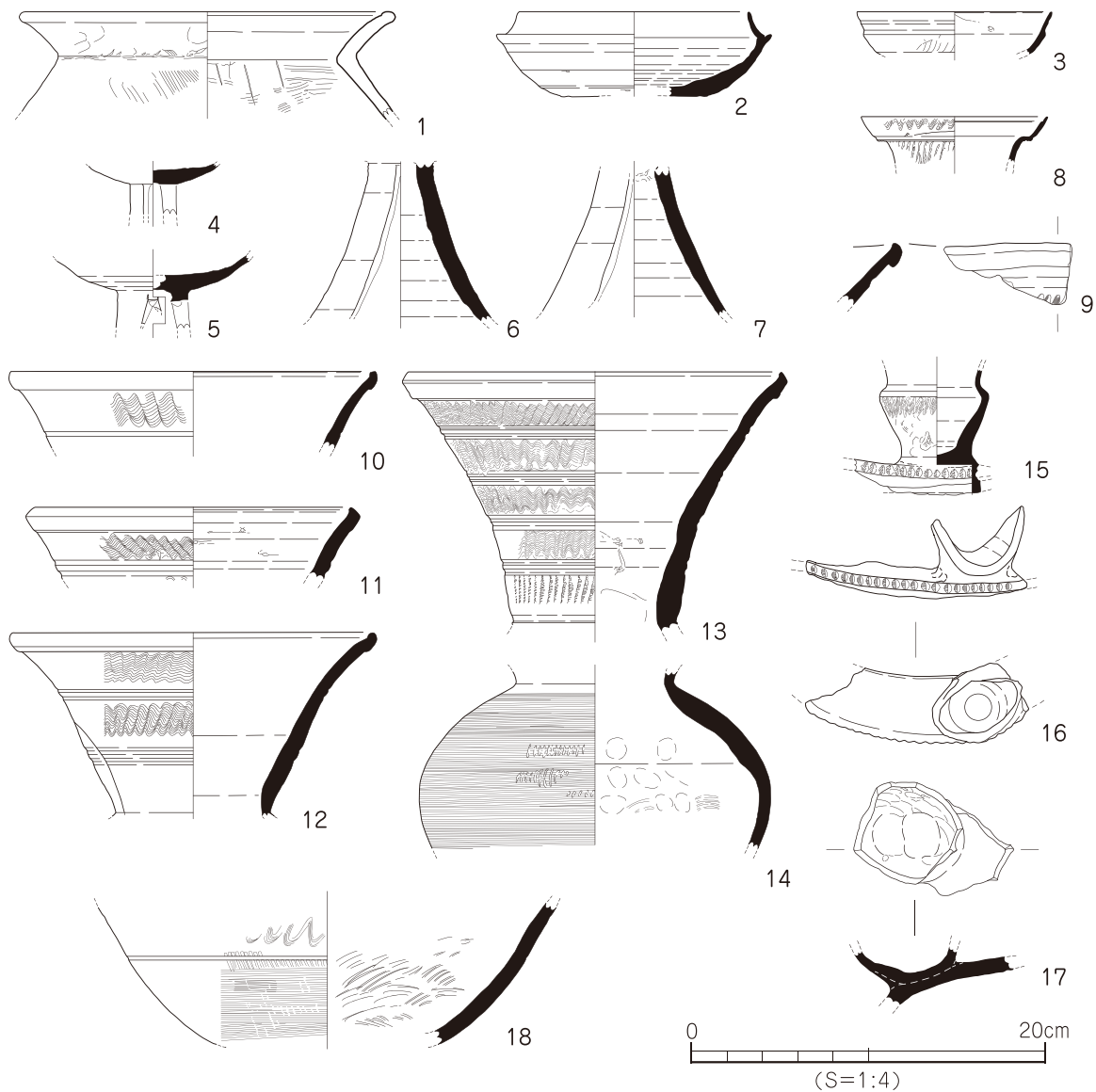
(5) 古墳出土遺物

本古墳周壕内からは南北括れ部を中心に多量の埴輪片や少数の須恵器片が出土した。しかし、調査の主体が削平された後円部残丘で、周壕部は範囲検出を主とした限定的な調査のため、周壕部分の掘削は部分的である。実際には築造当時、相当数の埴輪が墳丘を圍繞していたと想起される。

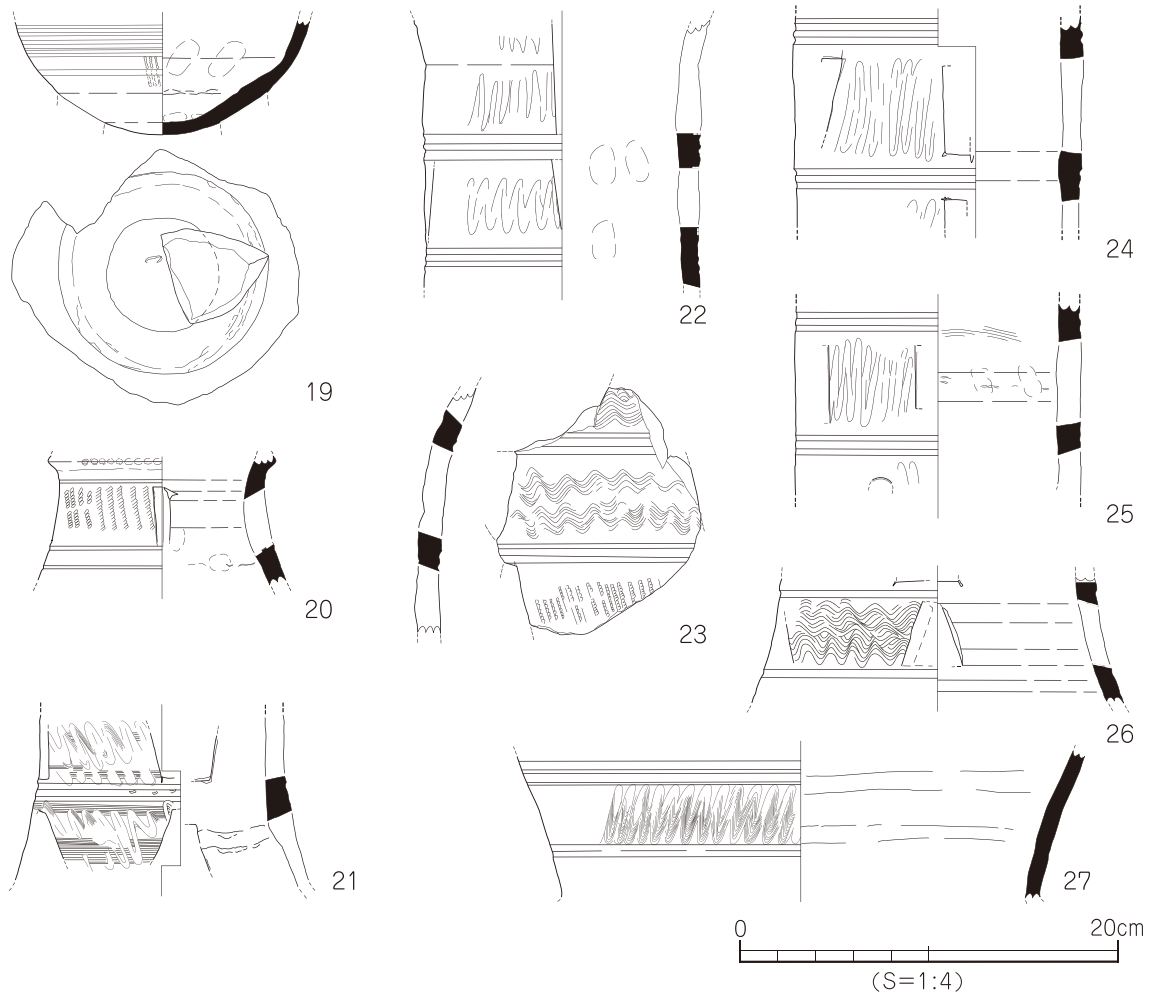
出土須恵器には子壺を有する壺や器台などの装飾付須恵器、確認可能な埴輪は円筒・朝顔形埴輪に加えて複数種の盾形埴輪や石見型埴輪などの形象埴輪も確認された。以下、個別に説明を加える。

1 土師器 (1)

1は土師器甕。復元径は約20cmで外面にはナナメハケ、内面には静止痕を伴うヨコハケを有する。口縁部は短く外反し、口縁端部内面はナデにより浅い窪みを持つ。



第11図 土師器・須恵器遺物実測図1



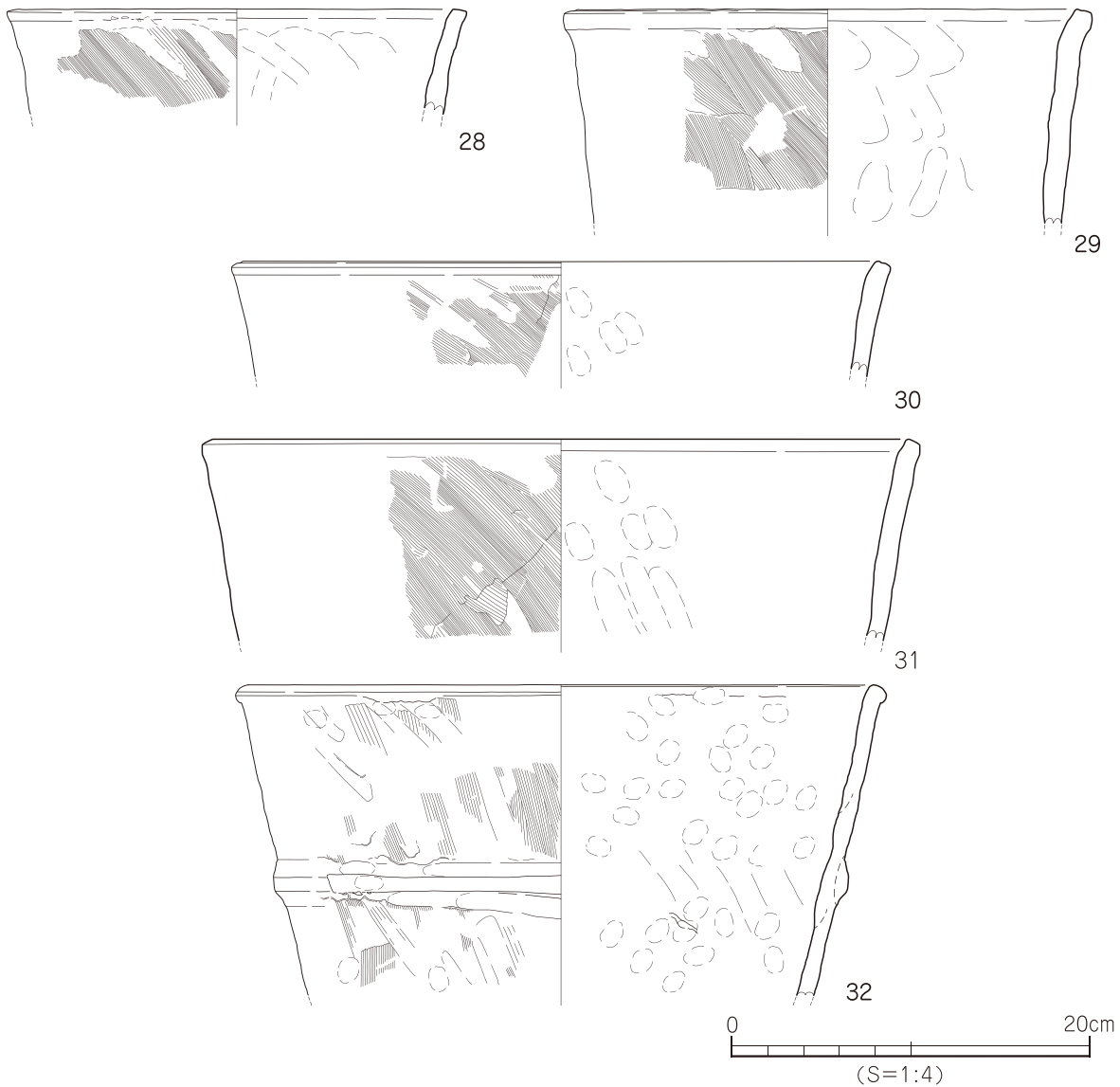
第 12 図 須恵器遺物実測図 2

2 須恵器 (2～27)

2は坏身。復元径 13.0cm、立ち上がりは短く内傾し端部は尖り気味。外面は全体の 1/2 程度回転ヘラ削りを施す。3は無蓋高坏の坏部。外面には自然釉がみられ、底部には斜線文が並ぶ。4～7は高坏脚部。4・5とも残りが悪く定かではないが、おそらく2方向のスカシ孔と考えられる。6・7は長脚1段スカシと推測される。8は甗。口縁復元径 10.5cm、口縁外面には波状文、端部内面には1条の沈線が認められる。幅広の頸部には斜線文。

9～14は壺。口縁端部は肥厚し、12・13外面には沈線の区画内に連続する波状文や刺突文を施す。14は頸部との接合部から肩部の個体で、外面には多条の櫛描文やタタキ目、内面には当て具痕を残す。15～17は子壺。15・16は親壺から延びる突帯上に貼付され、突帯端部は刻目列で装飾する。17は親壺肩部に直接貼付し、子壺内面には接合時にオサエ痕が残る。

18は器台受け部。沈線で区画し外面に波状文・櫛描文、内面に当て具痕あり。19は子持壺・親壺底部で、脚部の剥離痕が観察可能。20・21は低脚器台の脚部か。複数条の沈線で区画され、波状文や刺突文のほか、縦列にスカシ孔(長方形・三角形)を穿つ。22～26は器台もしくは子持壺の長脚部で、三角形・円形・長方形のスカシ孔が列状に並ぶほか、縦長(22・24・25)や密(23・26)な波状文で装飾する。27は甗頸部で大型品。区画沈線内には縦長の波状文を丁寧に施す。



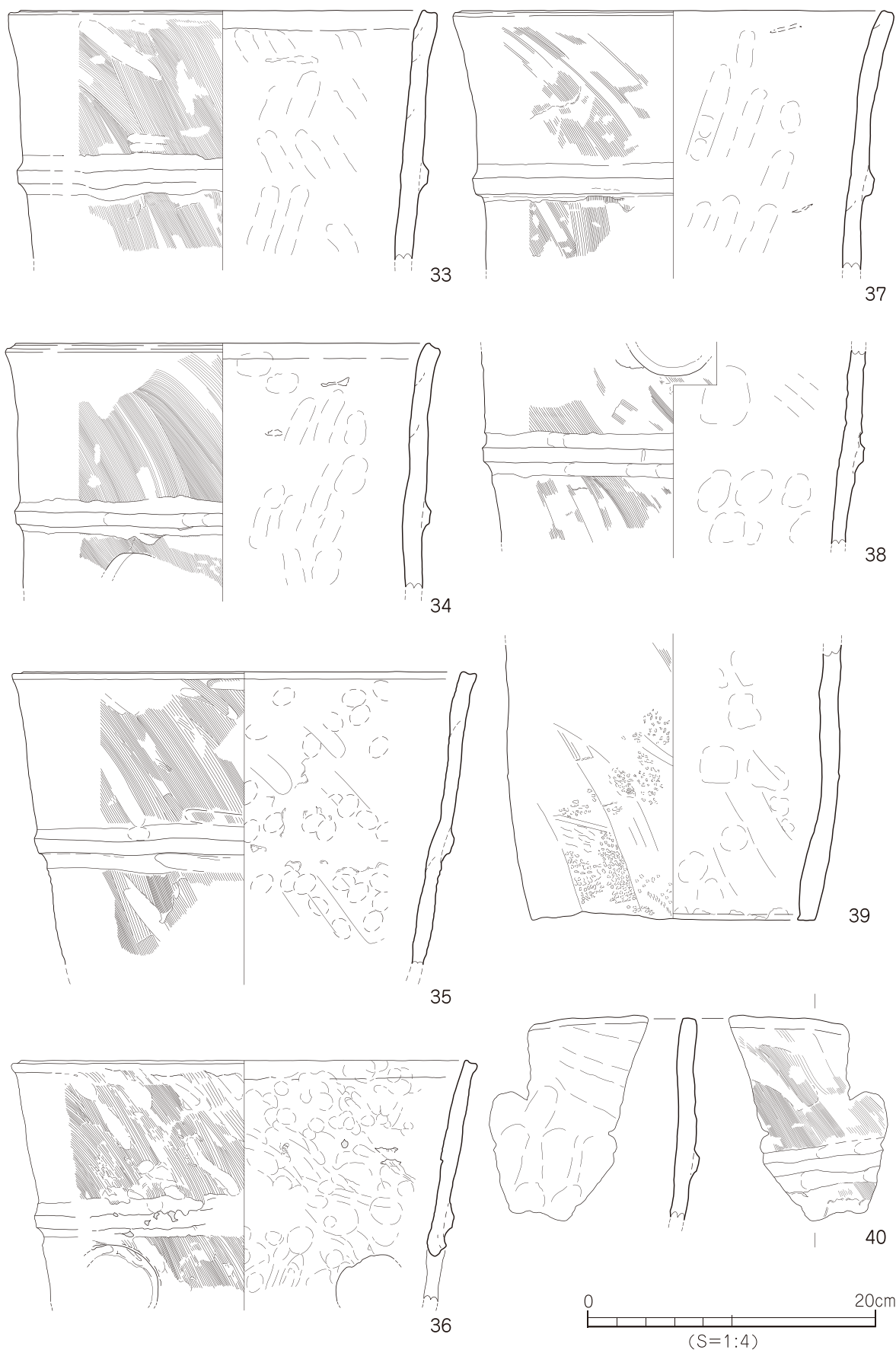
第 13 図 円筒埴輪実測図 1

3 埴輪 (28 ~ 117)

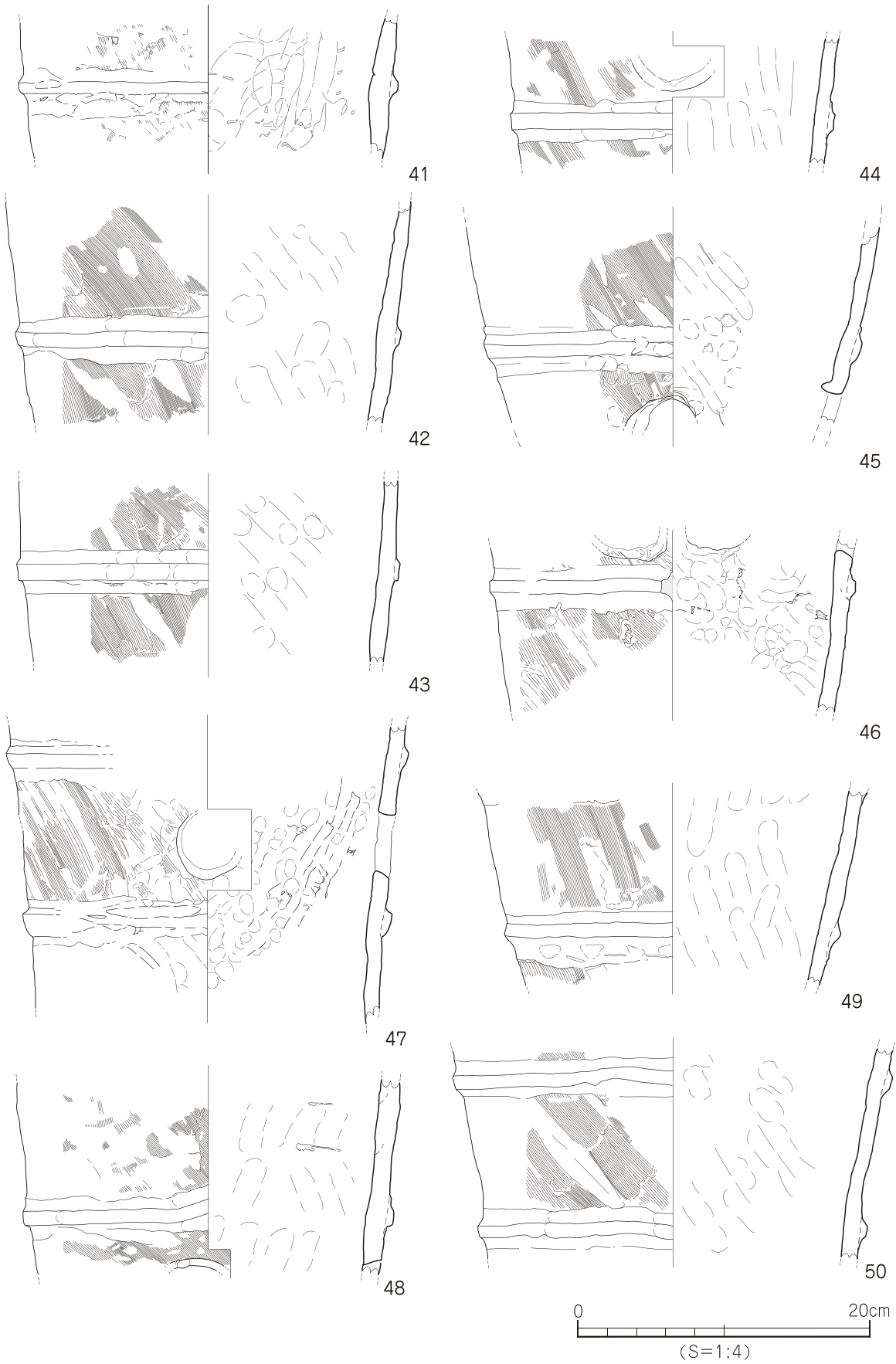
円筒埴輪 (28 ~ 68)

28 ~ 37・40 は口縁部。復元口径のため差異はあるが、31 を除き概ね口径 28 ~ 35cm の範疇である。口縁端部にかけて外傾し、端部内面には幅 2 cm 程度の指ナデが強く施され、端面も指ナデにより中央に窪みを持つ (33 ~ 36)。器面調整は外面に細かな左上がりのナナメハケ、内面はナナメナデ・指オサエが残る。突帯は口縁端部より 9 ~ 10cm 離れて指ナデにより丁寧に貼付されており、断面台形状を呈する。上下の波打ちが少なく突帯部分の剥落も非常に少ない。口縁部下段に円形スカシ孔を穿ち、1 段あたり 2 孔と推定する。37 ~ 39 は同一個体と思われ、基底部 (39) は復元底径 19.5cm、基底部高は概ね 20cm を測る。外面を板状工具によるオサエ、内面を指オサエによる「基底部倒立調整」を行い、その後正立状態に戻したため基底部端面は波打たず置台痕が残ったままとする。なお、端部外面を中心に粗目の布目痕跡が残る (註 1) が、この点は後述する。

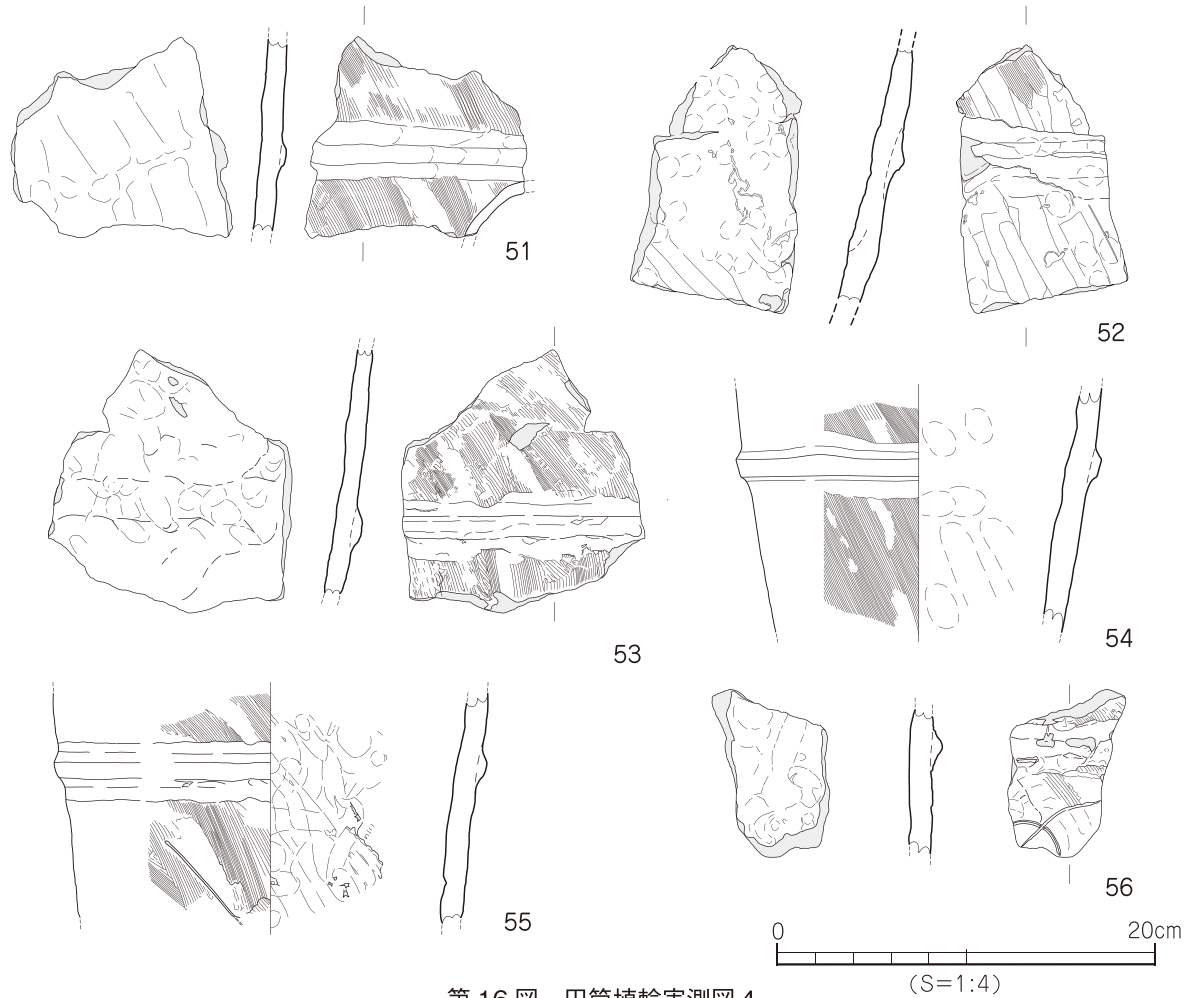
41 ~ 56 は突帯を含む体部。突帯断面は台形状を呈するものが多いが、ナデ付けにより断面三角形



第14図 円筒埴輪実測図2



第15図 円筒埴輪実測図3



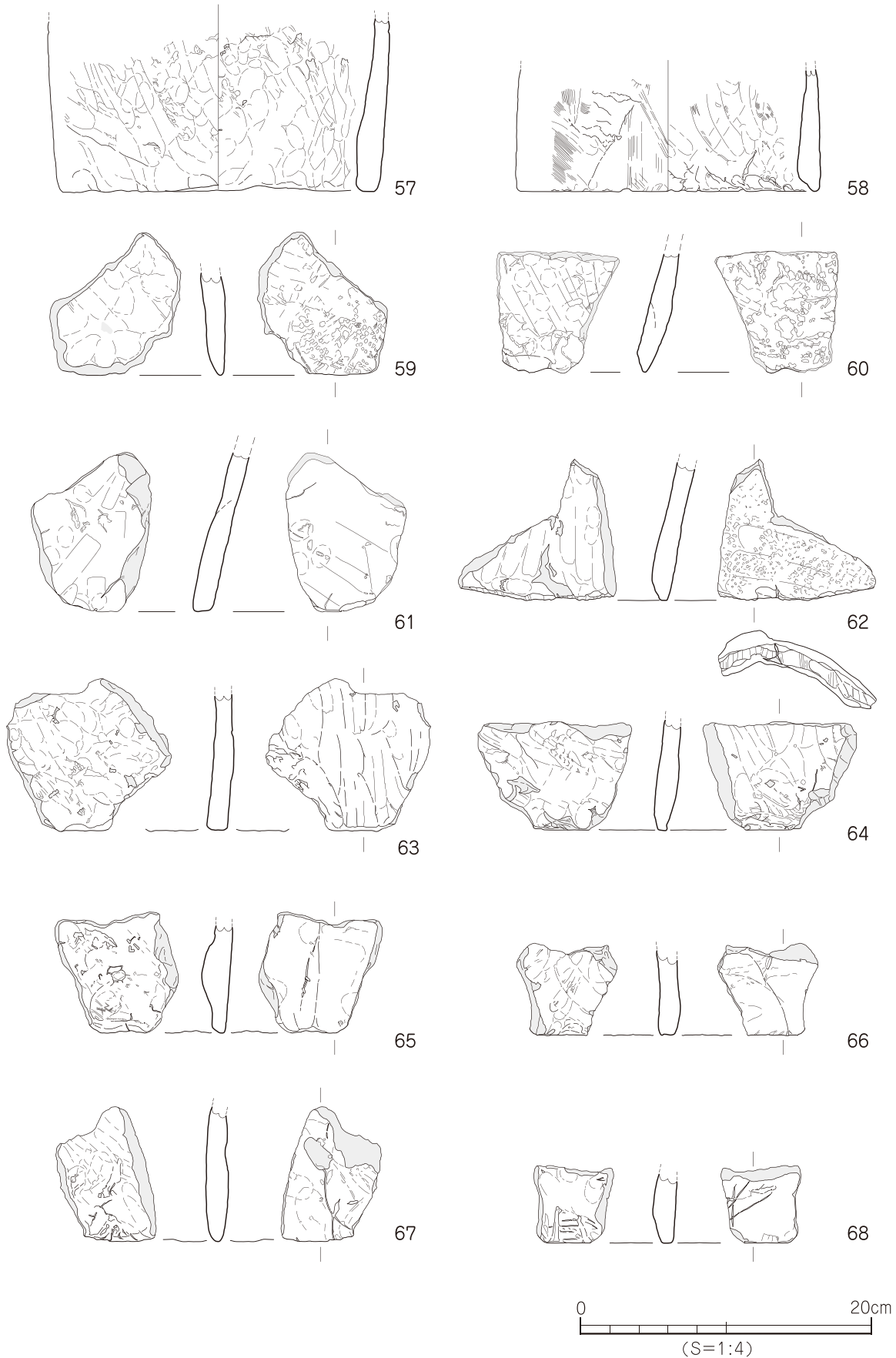
第 16 図 円筒埴輪実測図 4

状の個体（47・49・52・56）も確認できる。体部径は個体差があり、円筒埴輪の口縁部と対応するものが多いが、44・54のように小型の個体も存在することから、朝顔形もしくは形象埴輪の体部に該当する可能性がある。スカシ孔は円形で1段あたり2孔と推定する。47・49・50は突帯間距離の分かる破片で、概ね10cm前後の範疇に入ることから、口縁部長とはほぼ同じと判断される。52は外面に板ナデが施されており、基底部付近と思われる。55・56は外面にヘラ記号のある個体。55は斜線、56は弧線が交差した文様を施す。

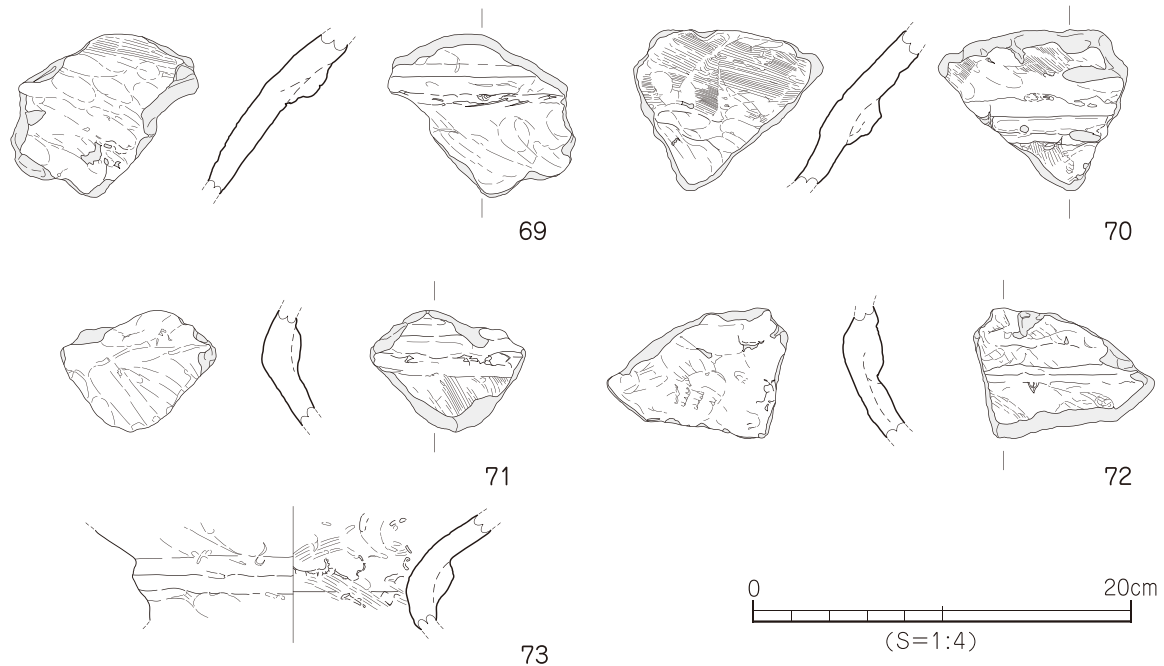
57～68は基底部。57・58は基底部径を復元可能な個体で、20～21cmを測る。外面を板状工具によるオサエ、内面を指オサエによる「基底部倒立調整」で基底部端面は尖らず平坦となる。外面には粗目の布目痕跡が残る。59～62にも粗めの布目痕跡が残るが、62のように端面に置台痕が残るなど正立状態での乾燥工程を想定できる。65・66の外面には板状工具によるオサエが顕著だが、布目痕跡が微かに残る。67・68は外面にヘラ記号。67は弧線の交差、68は複数条の斜線文様を施す。

朝顔形埴輪（69～73）

69・70は二段口縁の接合部付近。接合部にはやや幅広の突帯を貼付しており、69には接合部分（突帯下）に貼付用の刻目列が確認できる。二次口縁部内面にはヨコハケが断続的に施される。71～73は括れ部から肩部付近。肩部は大きく張らず、外面にはナナメハケ、内面には指オサエ・ナデを施す。73の括れ部内面には粘土紐接合のためのヨコハケが散見される。



第17図 円筒埴輪実測図5



第 18 図 朝顔形埴輪実測図

盾形埴輪（74～106）

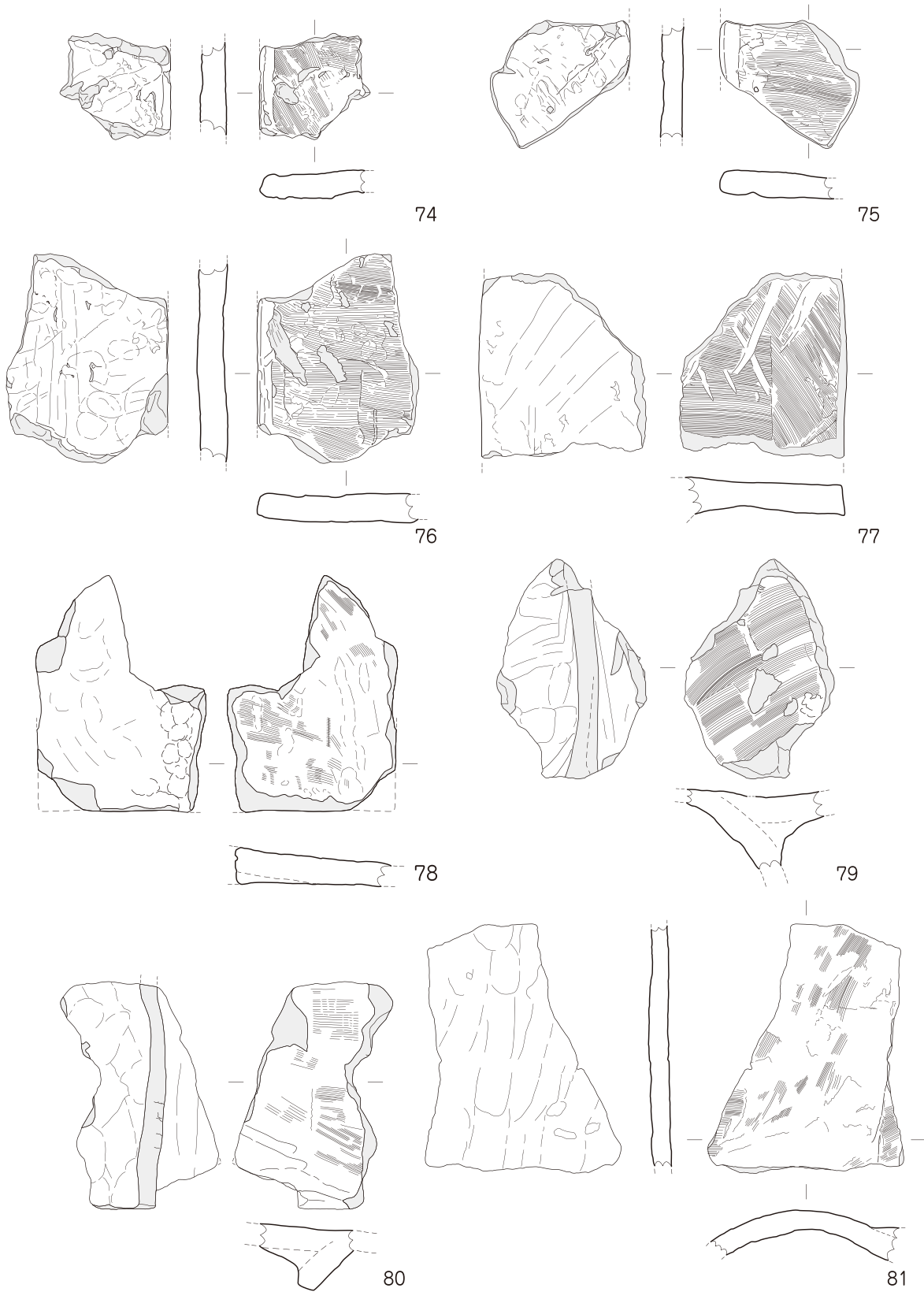
74～85は無文の盾面部。74～78は盾面縁部分で、文様面には不定方向の細かなハケ調整を施す。縁部は指ナデにより丁寧な仕上げがなされ、裏面は指ナデ・オサエがみられる。78は円筒部との接合部付近で、文様面側の細かなヨコハケと対応して裏面に接合時の指オサエ列が並ぶ。79～85は円筒部との接合部分で、円筒部に鱗状の盾面を貼付し文様面を一体化させる。裏面には接合時の粘土充填が窺える。81は円筒部文様面。僅かに鱗部との接合部が残存する。

86～106は線刻表現のある盾面部。86は2条の平行線文の間に斜格子文を連続させるものと想定される。88は連続山形文、90・91は斜線文の可能性が高い。89・92～94は幅狭の2条平行文線刻あり。89・92は厚みがあり若干湾曲することから、馬形埴輪などにみられる革紐表現の可能性あり。94には平行線文に加えて鱗状の2条単位の弧線が描かれており、石見型埴輪との共通項が認められる。95は文様面の外区に幅広の2条斜線文が施され、円筒部との接合部付近には指オサエ列が残る。96～106は2条の平行線文の間に斜線文を連続させるものである。平行線および斜線の幅には個体差があるが、縁部に平行して施されることから、盾面縁部を区画表現する線刻と判断できる。103・106には区画線刻内に斜線文が施されており、95と共通する。104は区画線刻の交差部分が残る。

石見型埴輪（107～113）

107は形象部上面で、以前の報告（山内 2022）後に一部破片が接合。焼成良好で盾形埴輪との見分けは容易である。上辺中央に「コ」字状の角状突起を貼付後、「U」字状の削り込みを施す。上面隅角は鋭角で、中央部および左側面には斜め上方から未貫通の小穿孔が認められる。

表面には2条単位の線刻が側部を縁取りし、その内側に鱗状の2条単位の弧線を下方に向かって描く。書き順は線刻の切り合い関係の観察から、突起部→側部→内側弧線となる。後面には指ナデ及び指オサエが横方向にみられ、粘土接合部が消されずに残る箇所も散見される。側面部は工具によるケズリ、角状突起との接点では粘土削り取りの際の削込み痕跡が残る。



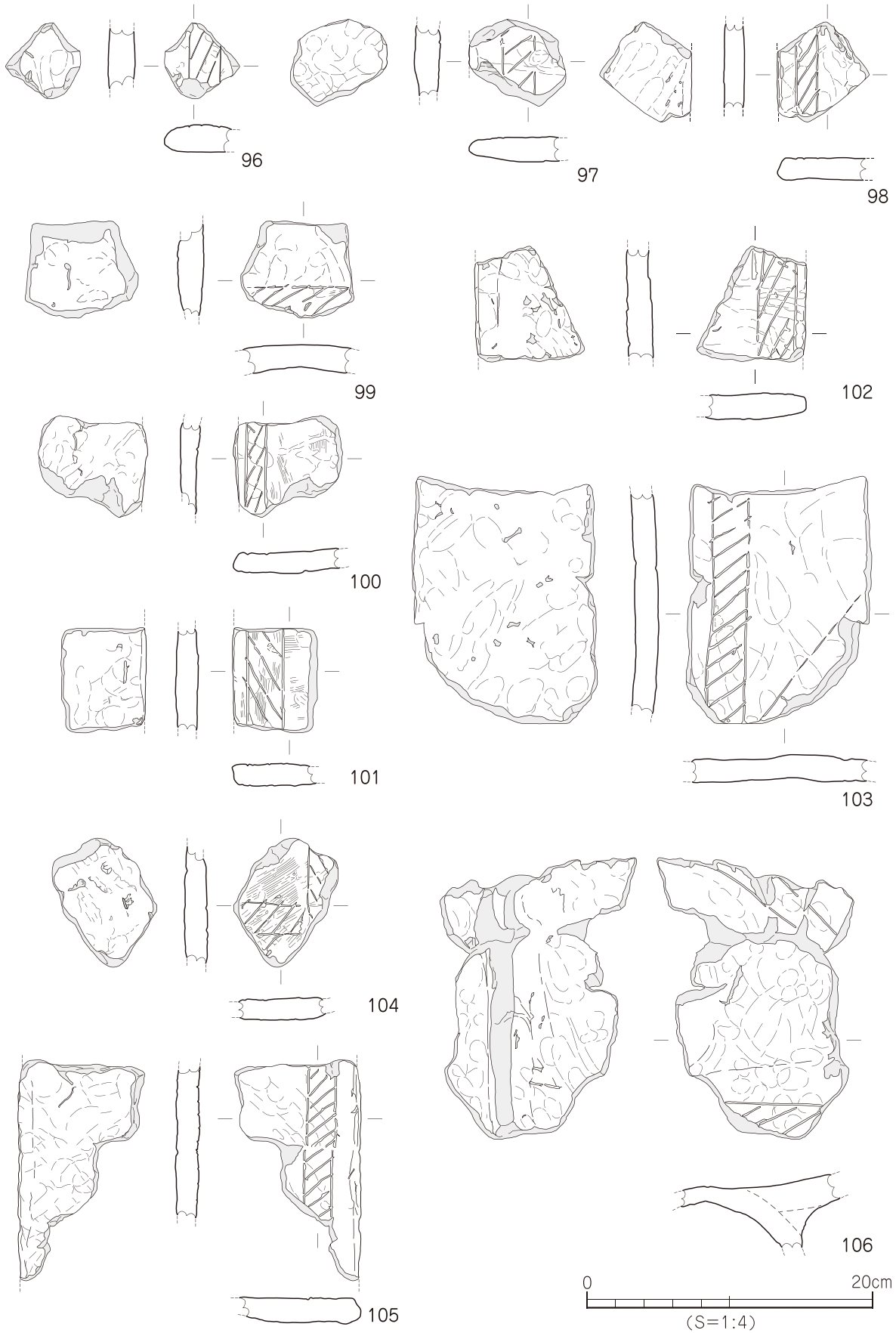
0 20cm
(S=1:4)

第19図 盾形埴輪実測図1

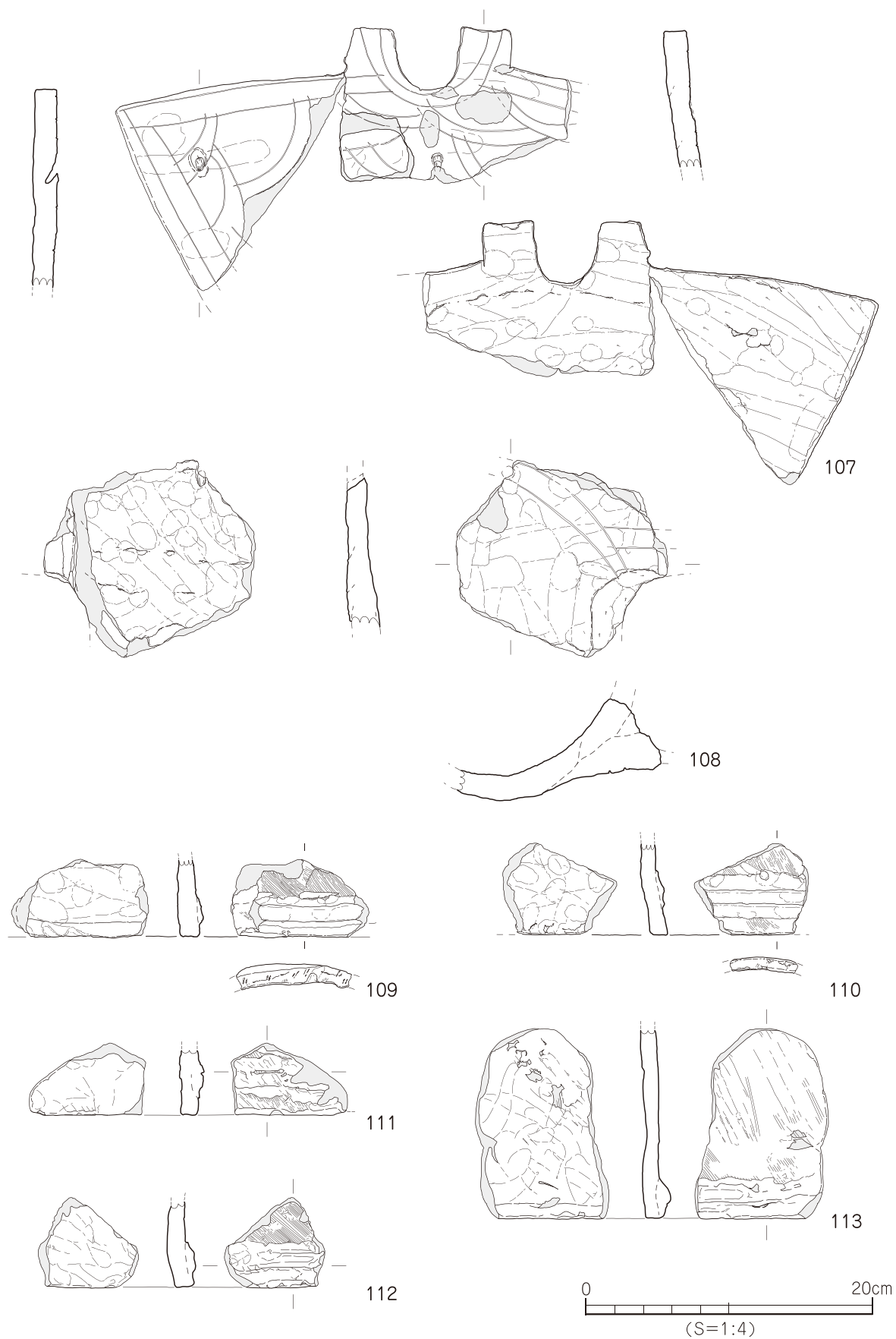


第20図 盾形埴輪実測図2

鶴塚古墳

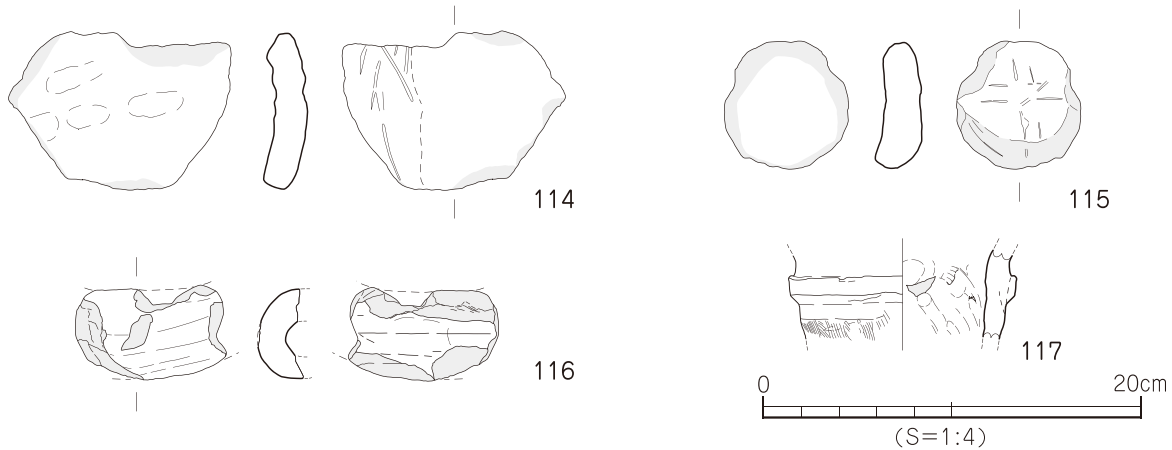


第21図 盾形埴輪実測図3



第 22 図 石見型埴輪実測図

鶴塚古墳



第 23 図 形象埴輪実測図

108 は形象部下面と基部との境界付近の破片。基部は内側に粘土帯積み上げ痕が残る（内傾接合）、形象部中央には斜め上方から貫通する小穿孔を施す。文様面は基部（円筒部）に鱗部を付加貼付し形成されており、丁寧なナデを施した後、2本の平行線刻（直線・弧線）で表現する。基部と鱗部の接合縁部は、工具ケズリにより屈曲部（直角）表現を明確にしている。

109～113 は基底部。109～112 の底端部外面には断面 M 字状の低い突帯が貼付されており、外面には細かいナナメハケが施される（突帯剥離部分にも残る）。109・112 は突帯下端が底端部に接する形、110・111 はやや底端部から離して突帯を貼付する。基底面には作業台の痕跡が残る、端部内面には指による横ナデが認められる。いずれの個体も底端部の潰れがみられない点や、ナナメハケの方向（上→下）、突帯貼付の方向（左→右）を勘案すると、粘土帯を積み上げ、一定の高さまで積み上げた後に器面調整・突帯貼付し、倒立させ天地逆転させたものと推測する。113 は突帯断面形がやや不整形で、色調や焼成が盾形埴輪に近いことから、盾形埴輪の基底部の可能性も考えられる。

その他形象埴輪（114～117）

114・115 は器種不明。厚みを持ち若干湾曲し、114 の粘土剥離面には斜格子の刻目が施される。115 には器面に幅狭の 2 条平行文線刻が交差しており、何らかの革紐表現か（馬形埴輪？）。116 は筒状で湾曲した形状を有することから、人物埴輪の腕となる可能性もある。117 も突帯径が狭く形象埴輪の一部と推測する。

（註 1）「畿内」通有の円筒埴輪では、基底部倒立調整時に倒立状態で布を被せ、乾燥した基底部壁に水分を与える工程が存在したとする廣瀬覚氏の見解がある（廣瀬 2021）。

【参考文献】

廣瀬覚 2021 「6 世紀の埴輪生産からみた『部民制』の実証的研究」 奈良文化財研究所

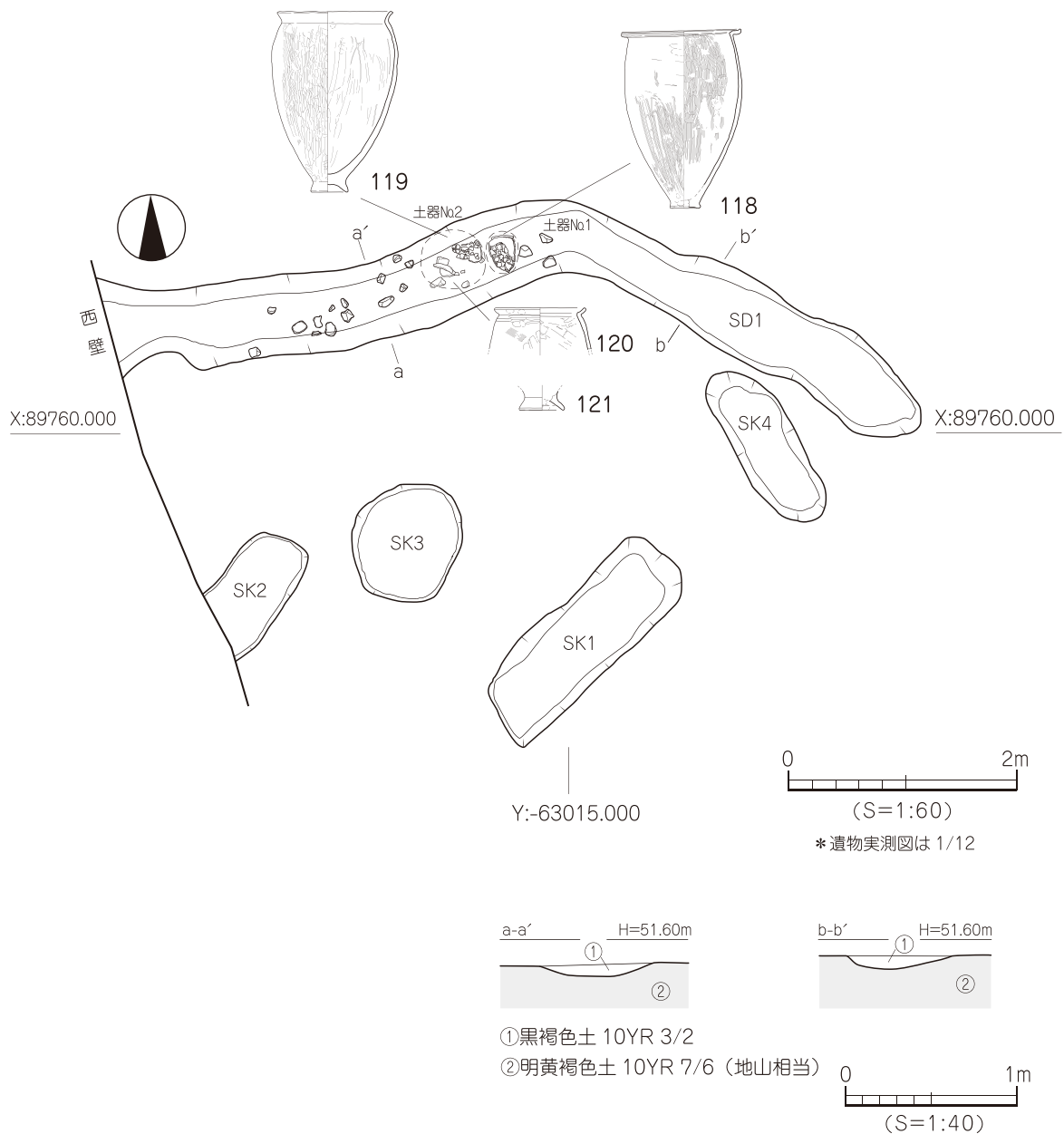
山内英樹 2022 「西部瀬戸内の石見型埴輪 - 松山平野の出土資料 - 」『埴輪論叢』第 11 号埴輪検討会

第2節 その他の遺構と遺物

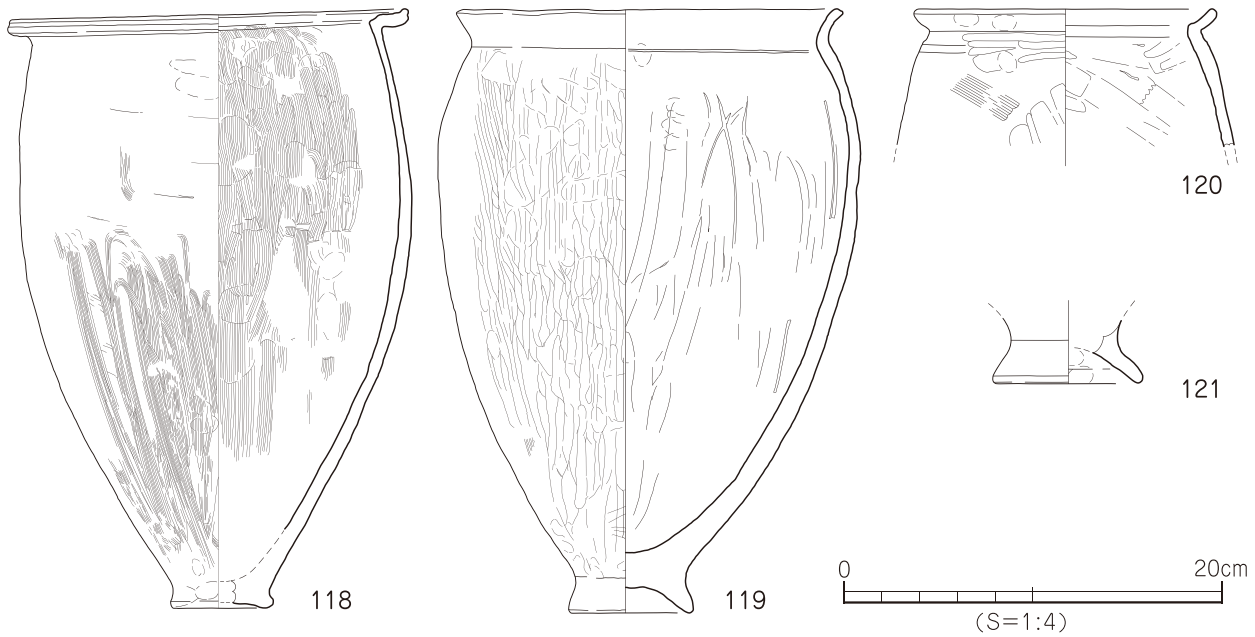
1区の西部では前方部の地山上面で溝（SD）1条、土坑（SK）4基、北側括れ部の周溝上面で土坑（SK）1基を検出したほか、後円部の盛土下より弥生時代の遺物包含層を検出した。

（1）溝（SD）（第24図）

SD1は1区南西部の前方部で検出東西方向の溝である。西側は調査区外となり全容は不明となる。検出規模は長さ7.30m、幅0.50～0.70m、深さ0.04～0.10mを測る。遺物は埋土中より弥生土器が出土している。



第24図 SD1 測量図



第 25 図 SD1 出土遺物実測図

出土遺物

118 はやや上げ底の小さな底部。胴部は外傾して上方に立ち上がり、内湾して口縁に至る。口縁部は短く外方に屈曲する。内面の胴部と口縁の接合部はナデにより凹む。口縁端部外面は 1 条の凹線が巡り、端部は上方に肥厚する。調整は胴部下半はミガキ、ハケ目調整が施される。胴上半はナデが施される。内面は指ナデや木口状工具によるナデ、ハケ目調整が施される。底部外面は指頭痕を残す。119 はくびれの上げ底。胴部は外傾して上方に立ち上がり、内湾して口縁に至る。口縁部は緩やかに屈曲して外上方に短く開く。口縁端面はナデにより僅かに凹む。調整は胴部は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラ削りが施される。口縁部は内外面とも横ナデである。120 の口縁部は屈曲して内湾気味に短く立ち上がる。端部は丸味をもつ。調整は外面板状工具によるナデやオサエ。口縁部下側はヘラ状工具による横方向のケズリが見られる。内面はケズリが施される。121 は 120 の底部と考えられる。くびれの上げ底である。

時期 出土遺物より弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

(2) 土坑 (SK) (第24・26図)

SK 1

SK 1 は東西方向の土坑である。平面形は隅丸長方形を呈する。検出規模は長さ 2.04 m、幅 0.66 ～ 0.74 m、深さ 0.26 m を測る。遺物は弥生土器と思われる小片が数点出土したのみである。時期については、時期比定に有効な遺物の出土がないため現時点では時期不明としておく。

SK 2

SK 2 は東西方向の土坑である。西側は調査区外となり全容は不明である。平面形は隅丸長方形を呈する。検出規模は長さ 1.00 ～ 1.10 m、幅 0.58 m、深さ 0.15 m を測る。遺物は出土していない。時期については、時期比定に有効な遺物の出土がないため現時点では時期不明としておく。

SK 3

SK 3の平面形は円形を呈する。検出規模は直径1.00m、深さ0.15mを測る。遺物は出土していない。時期については、時期比定に有効な遺物の出土がないため現時点では時期不明としておく。

SK 4

SK 4は南北方向の土坑である。平面形は隅丸長方形を呈する。検出規模は長さ1.54m、幅0.54m、深さ0.05mを測る。遺物は出土していない。時期については、時期比定に有効な遺物の出土がないため現時点では時期不明としておく。

SK 5

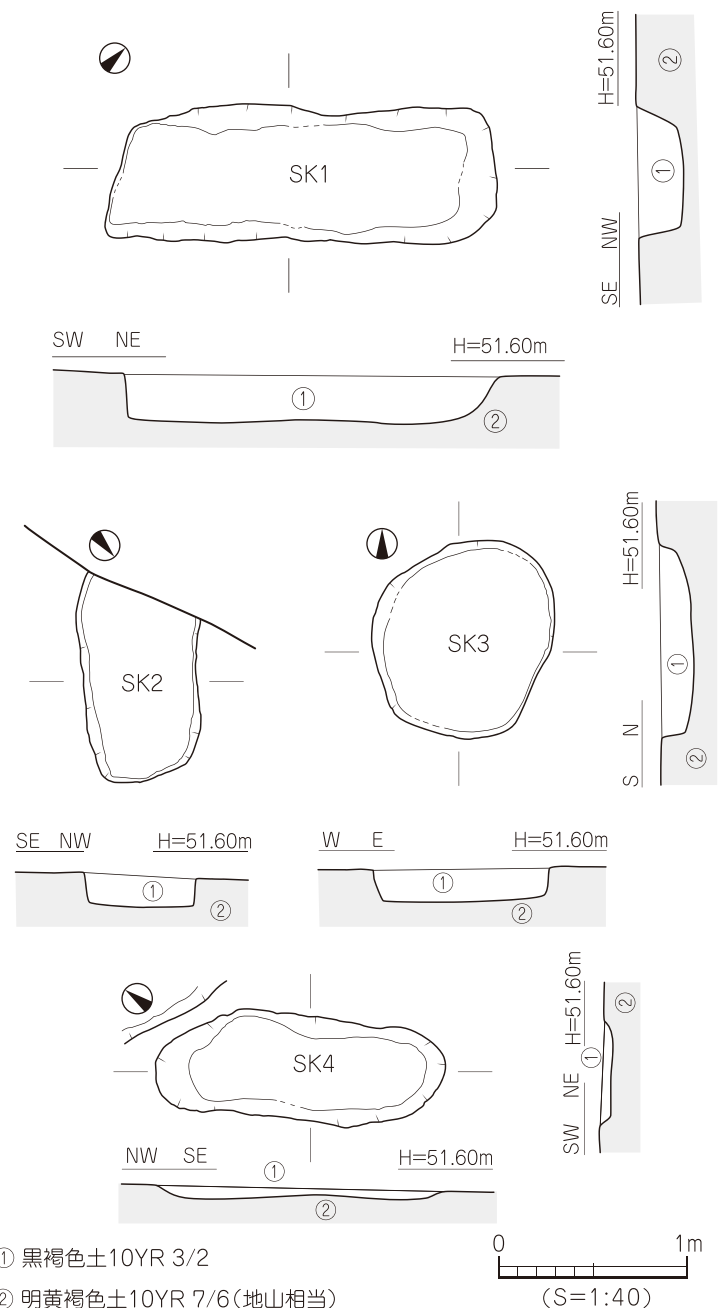
SK 5は北側括れ部の周壕内で検出した土坑である。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.90m、深さ0.15m以上を測る。完掘はしていない。遺物は土師器片が出土している。おそらく周壕を切って掘られていると考えられる。

時期は出土遺物より古代～中世と考えられる。

(3) 包含層出土遺物(第27図)

鶴塚古墳の後円部南側の盛土下には、弥生時代の包含層（黒色土）が良好な状態で遺存していた。この包含層中より弥生時代中期末～後期初頭にかけての甕、鉢、高坏などの土器が出土した。これら遺物の出土状況は黒色土全体から均一に出土するという状況ではなく、線状に並ぶ出土状況であった。平面の精査を行い遺構の検出に努めたが遺構は検出できなかった。出土遺物は人為的に割られたものか、土圧の影響で割れたものか、復元完形品が多いのが特徴である。

調査の都合上、出土状況の図面作成の時間が無かったため、遺物はA～Gの出土範囲で取り上げ、その位置を図示した。



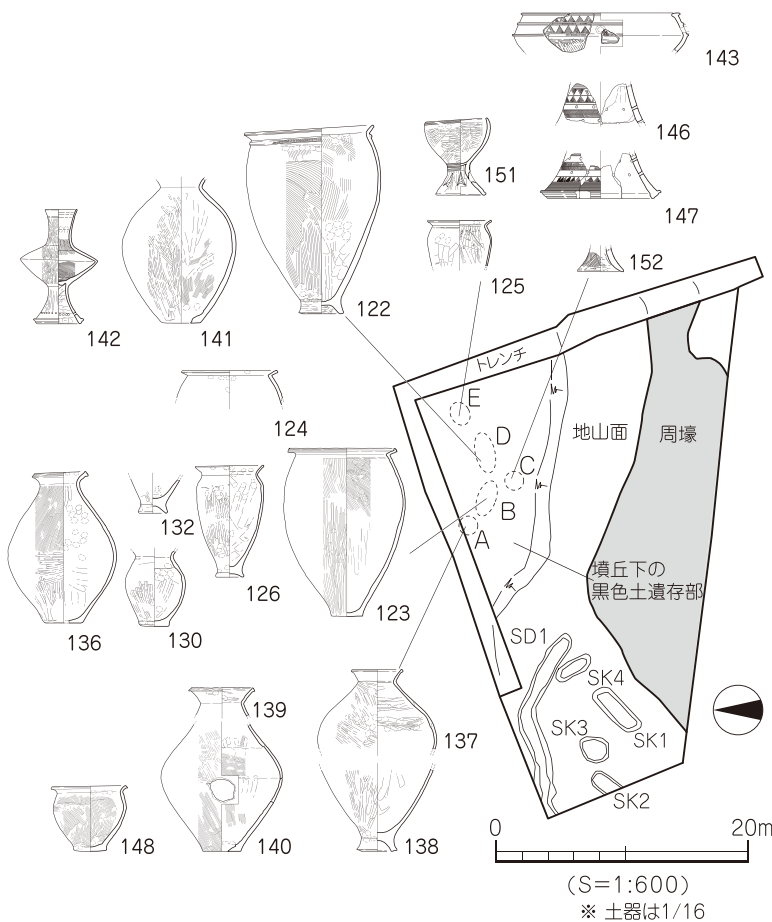
第26図 SK1・2・3・4測量図

甕形土器 (122 ~ 135)

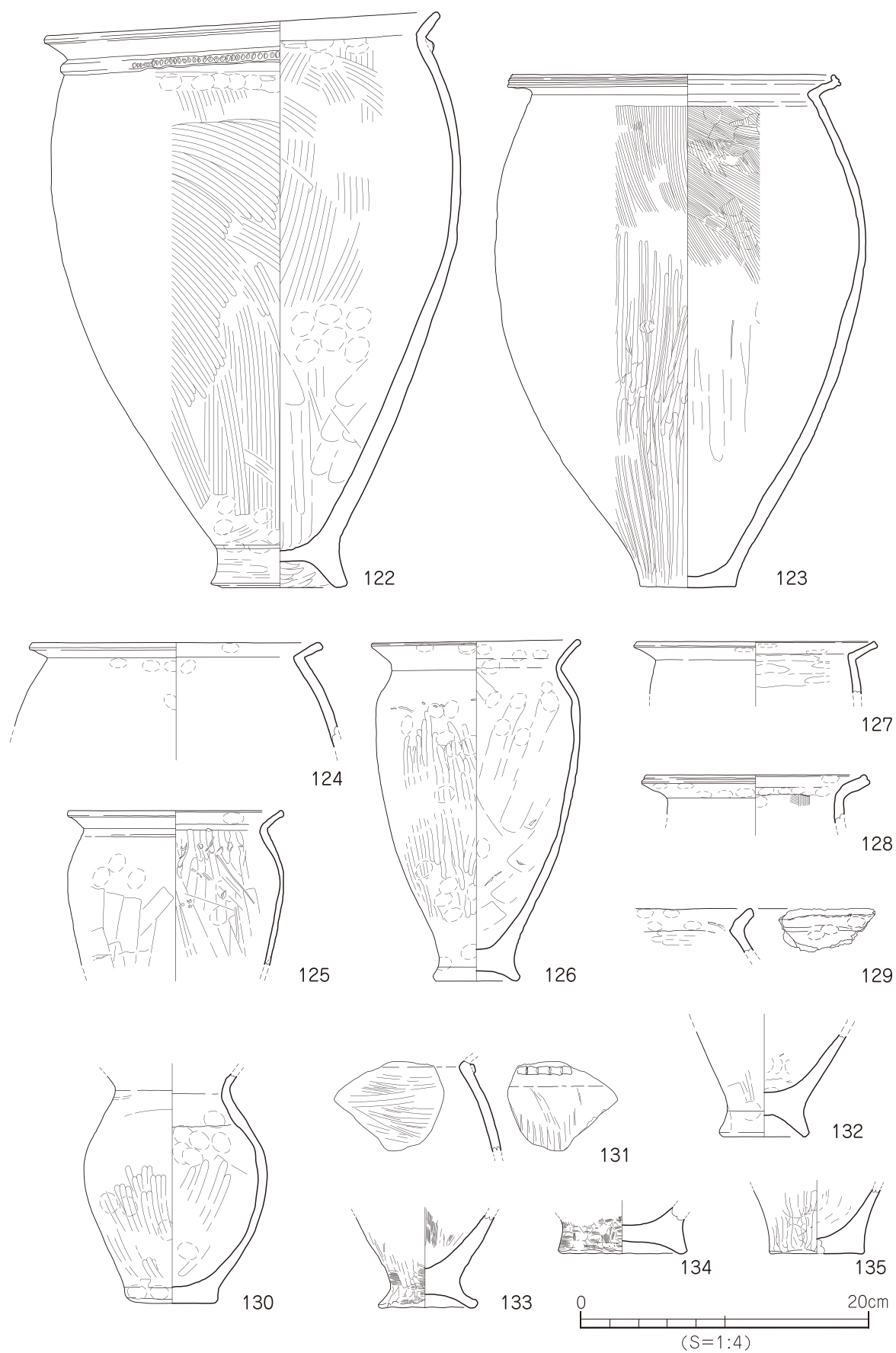
122 の底部はくびれの上げ底。底部端面はナデにより凹む。頸部に刻み目突帯を巡らす。口縁端面はナデにより凹む。調整は胴部外面は横方向や斜位のヘラミガキ、胴部下半は縦方向のヘラミガキを施す。内面は胴上半をハケ状工具によるナデ、指ナデ、下半は縦方向のヘラミガキ、指ナデを施す。胴部中位に煤が付着する。123 は平底の底部。口縁部は水平気味に開く。口縁と胴部境の内面は強い横ナデにより凹む。口縁端面には2条の凹線文が施され、口縁端部は上方に肥厚する。調整は胴部上半をハケ目、下半は縦方向のヘラミガキを施す。内面はハケ目のちナデ調整である。124 の口縁部は短く外上方に開く。口縁端部は下方にやや肥厚する。調整は内外面ともナデ調整である。125 の口縁端部はやや丸味をもつ。調整は胴部外面ヘラミガキ、内面もヘラミガキが施される。126 は小型品。復元完形品である。底部はやや上げ底。肩の張る胴部から屈曲して外上方に開く口縁部。調整は胴部外面ヘラミガキ、口縁部は粗い横ナデが施される。内面はナデ調整である。127 の口縁端部はやや肥厚する。内面はヘラミガキが施される。128 の口縁端面はナデにより凹み端部は上方に肥厚する。調整は内外面とも横ナデである。129 の口縁部は下方に肥厚する。130 は平底の底部。口縁部は欠失する。調整は胴部下半の外面はヘラミガキ、上半はナデ調整。内面も胴下半はヘラミガキ、上半はナデ調整である。131 は頸部に押圧突帯が施される。内外面ともハケ目調整が施される。132、133 はくびれの上げ底。134 はやや上げ底の大型の甕の底部片。135 は平底。外面ヘラミガキ、内面はナデ調整である。

壺形土器 (136 ~ 142)

136 は平底の底部。胴部最大径を胴中位にもつ。口縁端部は上下に拡張し2条の凹線文を施す。調整は胴部外面の下半を縦方向のヘラミガキ、中位を横方向のヘラミガキ、上半は縦方向のハケ目調整を施す。内面は指ナデ、板状工具によるナデが施されるが指頭痕を残す。137 と 138 は同一個体の可能性がある。137 は胴中位が張り、口縁部は「く」字状に開く。外面ヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキが施される。138 はくびれの上げ底である。底部は内側で接地する。調整は外面は縦方向のヘラミガキ、内面は底部にナデ、胴中は板状工具によるナデが施される。139、140 は同一個体と考えられるが接合部の一致ケ所が無

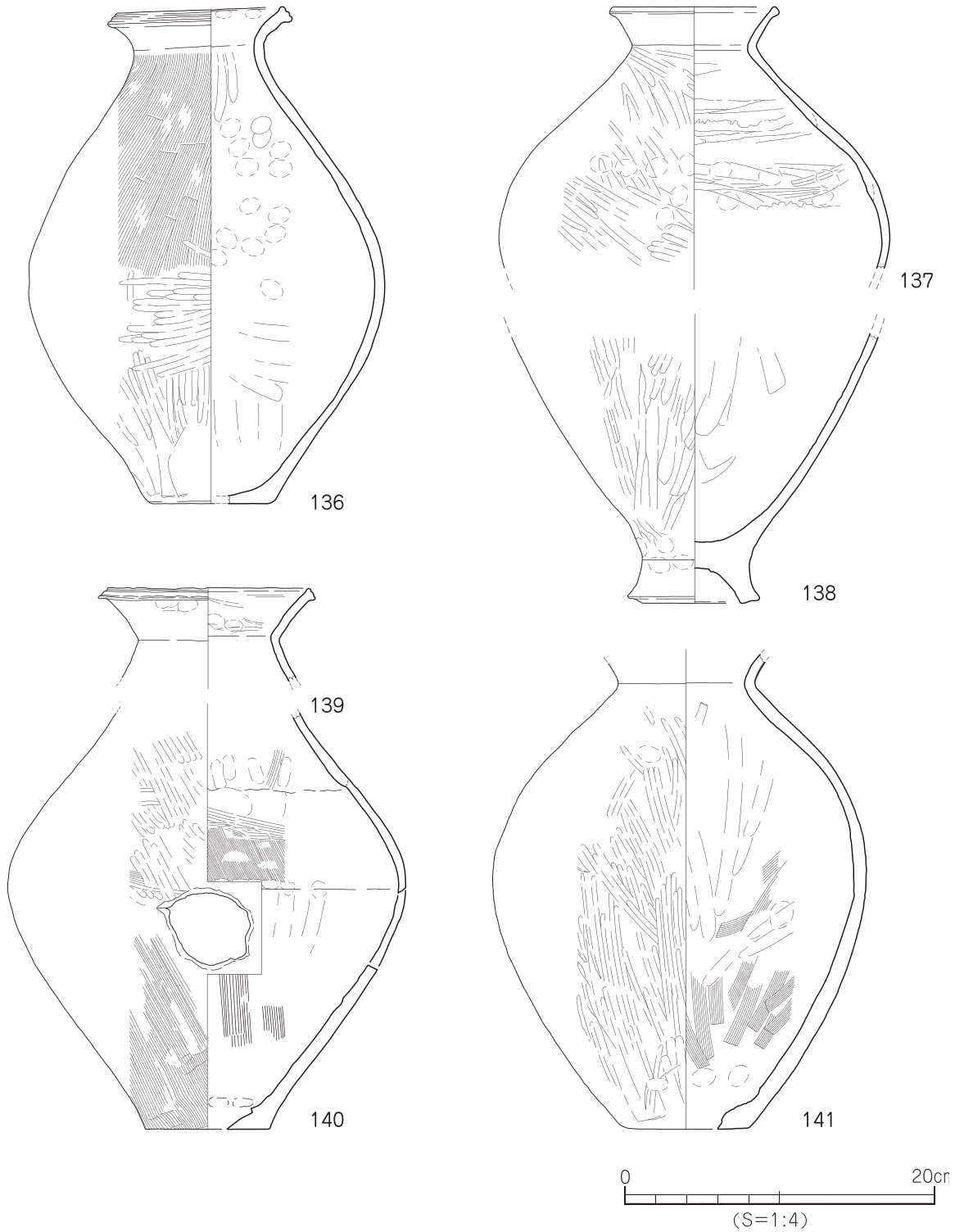


第 27 図 黒色土出土遺物配置図



第 28 図 黒色土出土遺物実測図 1

い。139 は口縁端部に 2 条の凹線文を施す。140 は頸部以上が欠失する。胴部中位に最大径を測る。調整は外面胴部下半はハケ目、中位以上はヘラミガキが施される。内面はハケ目のちナデ調整である。胴部上半は指頭痕を顕著に残す。胴中位に焼成後の穿孔が見られる。底部中央も欠失するが意図的な打ち欠きなのか判別はし難い。141 は平底の底部。底部中央部は欠失する。胴部は中央で最大径を測る。口縁部は欠失する。調整は外面ヘラミガキ、内面は胴部下半をハケ目、上半は指ナデ、板状工具によ

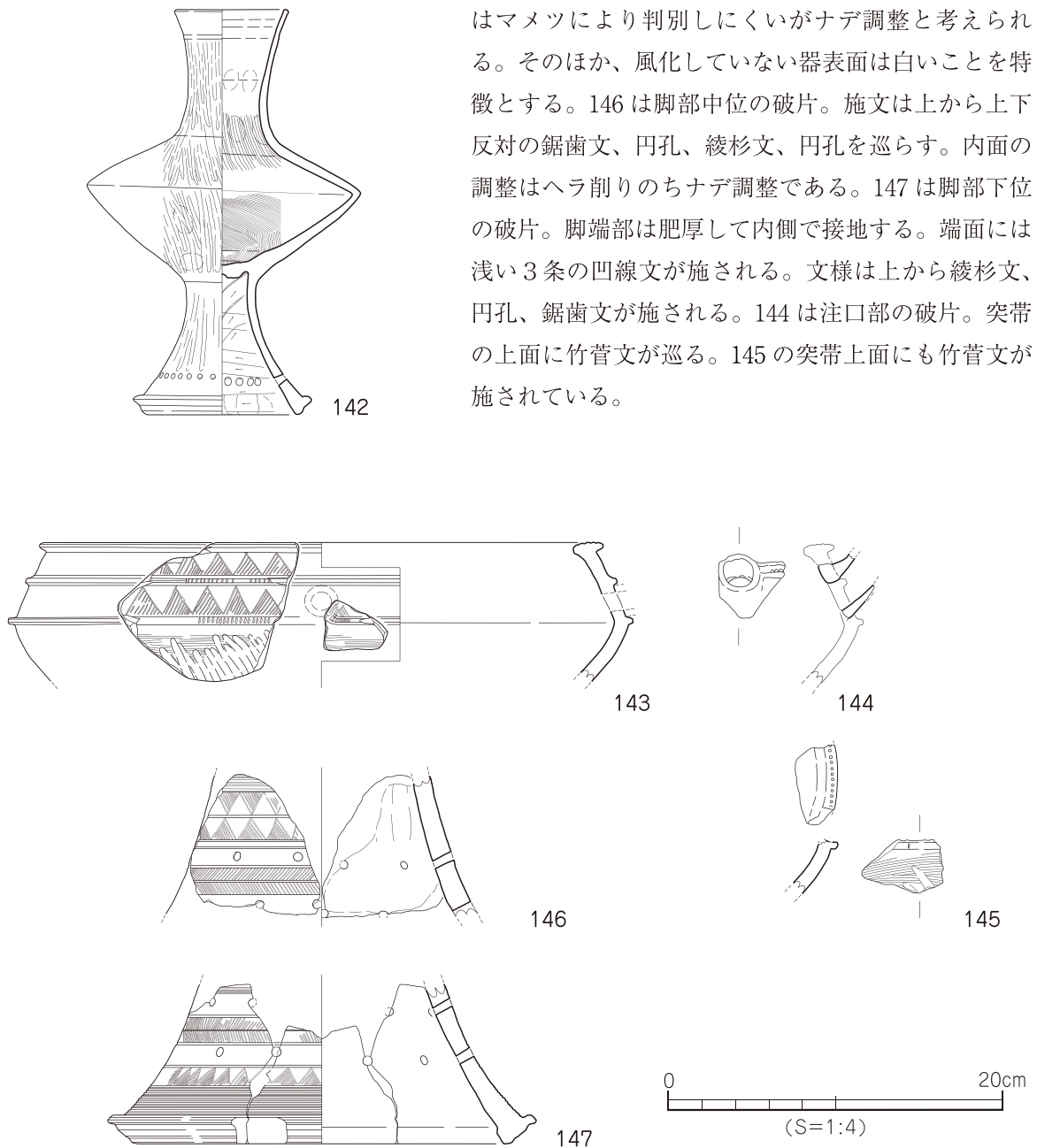


第 29 図 黒色土出土遺物実測図 2

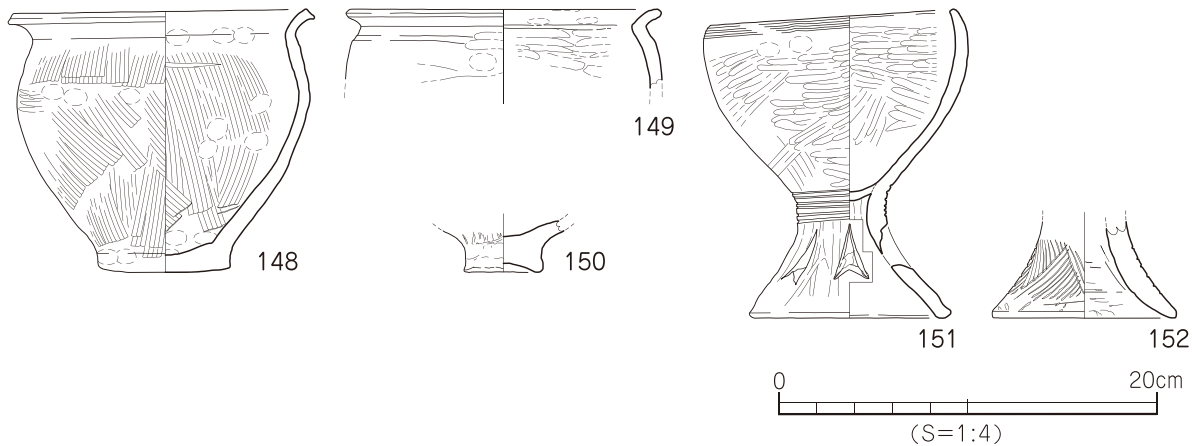
るナデである。142 は台付直口壺。その形態より岡山県からの搬入品と考えられる。脚端は強いナデにより外上方に肥厚し内側で接地する。脚部に直径 2mm の円孔を巡らす。円孔は内側から施される。円孔のうち 1 個だけ裏側に粘土塊でふさがっている。胴部は算盤形を呈する。口縁部はやや外反して外上方に開く。調整は脚部内面はヘラ削り。胴部との接合部にシボリ痕を残す。外面はヘラミガキのちナデ調整。胴部から口縁部の外面はヘラミガキである。口縁部は内外面とも横ナデである。

143 ～ 147 は脚台付注口土器で備後地方からの搬入品。同一個体と考えられるが 144、145 は注口部や注口部付近の破片で施文に違いが見られる。143 は口縁端部は水平に拡張され端面には 4 条の凹線を施す。体部上半に上下 2 条の突帯を巡らす。突帯には刻目文を施し文様帯には鋸歯文を上下 2 段

に巡らす。調整は体部下半の外面をヘラミガキ、内面はマメツにより判別しにくいナデ調整と考えられる。そのほか、風化していない器表面は白いことを特徴とする。146 は脚部中位の破片。施文は上から上下反対の鋸歯文、円孔、綾杉文、円孔を巡らす。内面の調整はヘラ削りのちナデ調整である。147 は脚部下位の破片。脚端部は肥厚して内側で接地する。端面には浅い 3 条の凹線文が施される。文様は上から綾杉文、円孔、鋸歯文が施される。144 は注口部の破片。突帯の上面に竹筍文が巡る。145 の突帯上面にも竹筍文が施されている。



第 30 図 黒色土出土遺物実測図 3



第 31 図 黒色土出土遺物実測図 4

148、149、150 は鉢形土器。148 は不安定な平底の底部。口縁部は短く屈曲して外上方にのびる。端部は外方に僅かに肥厚する。端面は強いナデにより僅かに凹む。胴部の調整は内外面とも粗いハケ目調整、口縁部は内外面とも横ナデが施される。底部外面はナデ調整。149 の口縁端部は丸味を帯びる。調整は内外面ともミガキである。150 はやや上げ底の底部片。

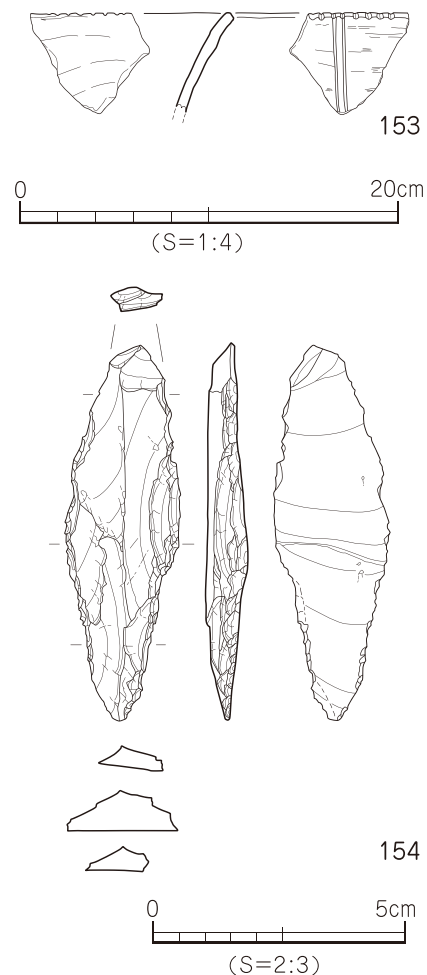
151 は高坏形土器。脚部に僅かに貫通する矢羽根透かしを 5 箇所に施す。脚端面は僅かに外に肥厚し端面には浅い凹線が看取される。脚と坏部の接合部に 6～7 条の沈線を巡らす。調整は口縁部は横ナデ、坏部は内外面ともヘラミガキである。脚部はマメツのため明確ではないが一部にヘラミガキが看取される。内面はナデ、オサエである。

152 は器種不明の脚部片。外面には上下の鋸歯文が施される。脚端は面をもち内側で接地する。調整は内面はヘラ削りのちナデ調整。外面はナデである。

(4) その他の出土遺物(第32図)

153 は出土地不明の縄文土器深鉢の口縁部。口唇部に刻み目を施し、口唇部から縦方向に 2 条の並行沈線を施す。時期は形態より縄文後期。

154 はナイフ形土器。後円部南側の周壕トレンチの地山上で出土したものである。長さ 7.45cm、材質は緑色片岩。



第 32 図 その他出土遺物実測図

第Ⅳ章 まとめ

今回の試掘及び本調査の結果、鶴塚古墳は周壕を有する墳長 34.5 m の後期前方後円墳であることが明らかとなった。埋葬主体は既に削平・攪乱により消失し、周壕は部分的な検出作業のみであったが、出土した須恵器片のほか、各種埴輪の出土は同平野の後期古墳と比較検討を進める上で良好な資料を提供した。また、墳丘盛土直下の包含層及び地山面で確認された弥生時代中期後葉の遺構や出土遺物の中には、中国地方からの搬入品と思われる資料（脚台付注口土器・台付直口壺）も含まれており、瀬戸内海を挟んで松山平野と中国地方の交流実態を窺わせる好事例でもある。

さて、鶴塚古墳を含む松山平野東部は、古墳時代後期前葉の前方後円墳が集中する四国でも特異な地域で、同エリアで 7 世紀に成立する初期官衙である「久米官衙遺跡群」との関係性も検討すべき課題である。残念ながら松山平野の後期前方後円墳は埋葬主体が消失・不明なものが多く、副葬品等についても資料不足の感は否めないが、外表施設に埴輪が採用される頻度が高いことから、埴輪から見た古墳間の比較検討は可能であると考ええる。

そこで本報告のまとめとして、鶴塚古墳から出土した幾つかの特徴的な資料に触れた後、円筒埴輪の分析結果を基に、鶴塚古墳を含む松山平野東部の後期前方後円墳の評価を行いたく思う。

1 特徴的な資料からみた鶴塚古墳

本古墳の築造時期を検討する上で、埋葬主体部が消失した現状では、周壕括れ部で出土した各種埴輪・須恵器が重要な資料となるが、破片資料が殆どで分析には困難を伴う。数量的に最も多い円筒埴輪については後に詳述することとし、本節では特徴的な個体である装飾付須恵器・石見型埴輪を取り上げ、先学研究をもとに検討を進めたい。

（１）装飾付須恵器

本古墳の装飾付須恵器は主に北側括れ部で出土が集中する。しかし、使用当時の配置（石室・墳丘）が不明で、親壺から脚部にかけての全形が判別可能な個体も皆無である。15・16 は親壺に貼付された胴部突帯の上に子壺を乗せ接合させたタイプ、17 は親壺肩部に直接貼付したタイプで、子壺底部に穿孔はない。壺系装飾付須恵器を検討した亀澤一平氏によると、子壺の形態と接合方法の分類では「D 類」に該当するが（亀澤 2013）、15 のように丁寧な作りの子壺も存在するため注意を要する。出現時期は亀澤氏のいう「Ⅲ～Ⅳ期」の範疇（6 世紀前～中葉）と現段階では捉えておく。

（２）石見型埴輪

本古墳出土の石見型埴輪については、既に松山平野出土の石見型埴輪として紹介・分析した経緯がある（山内 2022）。明確な土製の石見型埴輪としては今のところ最西端での出土であり、墳長 50 m 未満の中型前方後円墳からの出土である点は、西日本への偏在的な分布傾向と一致するなど特徴的である。107 は形象部上面部に「コ」字状の角状突起及び「U」字状刳込を有し、鱗状の 2 状単位の弧線で飾っており、その全体形は不明ながら和田一之輔氏の分類（和田 2006）を参考にすると「弧状 1 型」の文様構成に類似し、概ね 6 世紀前半（MT15 ～ TK10 型式期）の拡散期の所産と推測する。

また、基部には底面よりやや上位に丁寧にヨコナデを施し貼付した底部突帯が確認できる。V 期の形象埴輪底部突帯を分類・検討した鐘方正樹氏（鐘方 2022）によると、鶴塚古墳の石見型埴輪・資料（109

～112)は「a I 類」に該当するが、盾形埴輪の可能性が高い資料(113)は「a I 類」でも底面と接地する部分が一部あり貼付も粗雑な印象を受ける。つまり、石見型埴輪と盾形埴輪で明確な製作工人が異なっており、「特注品」として石見型埴輪を受容している可能性が高いと想定する。

2 松山平野東部の後期円筒埴輪と鶴塚古墳

鶴塚古墳出土の円筒埴輪については、周壕部を完掘していないため破片資料の復元が困難で、その全形を復元可能な個体が現状では皆無である。しかし、各部位を詳細に分析すると松山平野の後期埴輪の比較検討には必要不可欠な情報が得られた。そこで先ず、鶴塚古墳の円筒埴輪を分類・評価した上で、形象埴輪との組み合わせを参考に年代的位置付けを行い、さらに周辺の後期前方後円墳の円筒埴輪と比較検討することで、同平野内の後期円筒埴輪の生産・供給について触れることとする。

(1) 鶴塚古墳出土の円筒埴輪と年代的位置付け

周壕出土の円筒埴輪について、形態・製作技法等に基づき以下に特徴を列記する。

- ① 口縁端部内面に強めの指ナデによる窪みを有する個体が多い(有・無の複数種あり)。
- ② 突帯は断続ナデ貼付→ヨコナデ整形・調整で、断面形は低い台形と M 字形の 2 種類あり。
- ③ 最下段突帯は断続ナデ貼付→粗めのヨコナデ整形により断面三角形の「断続ナデ技法 A」。
- ④ 突帯は大きく波打たず貼付され、突帯間隔は 10cm 前後にまとまる(設定痕の存在?)。
- ⑤ 基底部は指オサエ・ナデの「正立調整」と強めのオサエ(板・指)を施す「倒立調整」。
- ⑥ 基底面に置台痕が残る個体が殆どで、基底部倒立調整→再度正立させ乾燥、と想定。
- ⑦ 基底部端付近に布目痕跡が残る個体が多い(基底部調整が施されても痕跡は残る)。

なお、各部位の諸特徴及び法量を勘案すると、器高 50cm 前後、口径 28～35cm、突帯間(口縁部高) 10～11cm、基底部径 20cm 前後で、3 条 4 段構成の個体を想定する。しかし、基底部高や基底部調整(正立・倒立)、口縁部や突帯形状も複数あることから、複数類型が存在するものと思われる。

この分析結果を基にすると、伊予における筆者の分類(山内 2008)では「円筒 8 類」に該当し、朝顔形・形象埴輪との組み合わせ(朝顔 5 類・形象 3 類)を参考にすると、「伊予Ⅳ－2 期」(6 世紀前葉)に位置付けられる。この結果は、前述の石見型埴輪の年代観とも概ね一致し、同時期の円筒埴輪にみられる大型化の現象と軌を一にするものである。

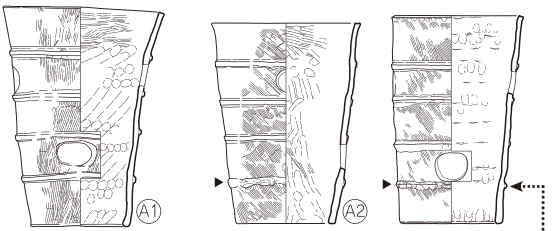
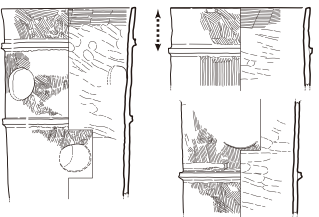
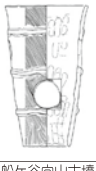
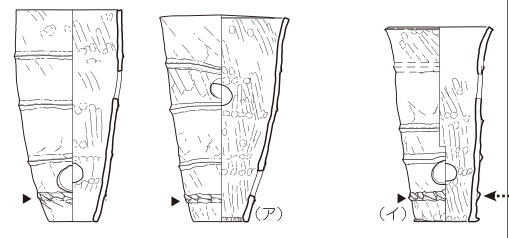
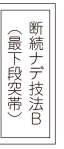
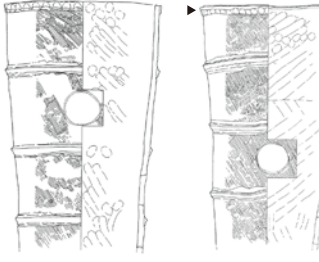
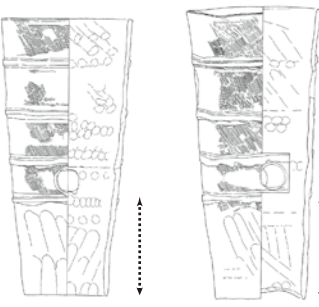
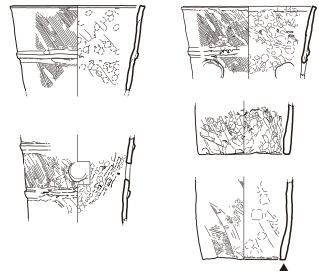
(2) 松山平野東部の後期円筒埴輪との比較検討

本古墳を含めた松山平野東部は、後期前方後円墳が集中する特異なエリアで、円筒・朝顔形をはじめ各種形象埴輪が採用されることが多い。次に、「伊予Ⅳ－2 期」(6 世紀前葉)前後の後期前方後円墳・円筒埴輪を比較検討し、その相違点と共通項を明確にしながら同時期の埴輪生産・供給関係について少し触れておく。

松山平野東部における後期前方後円墳の円筒埴輪について提示したのが第 33 図である。今回は墳丘規模によって大型(墳長 60 m 以上：二つ塚古墳)・中型(墳長 30～50 m：三島神社古墳・播磨塚天神山古墳・鶴塚古墳)に区分し、古墳ごとの類型化と諸特徴を抽出した。

まず各円筒埴輪の規格であるが、墳丘規模に関わらず 4 条 5 段構成の規格が最も多く、中型前方後円墳の播磨塚 A・B 類で器高 65～70cm と最も高い。一方、大型前方後円墳の二つ塚 A 類は器高 50～55cm と前者に及ばないが、底径・体部径が大きく寸胴で、三島神社や鶴塚では器高 50cm 前後でやや小型な印象を受ける。つまり、松山平野東部では前方後円墳の規模に関わらず概ね 4 条 5 段構成を

まとめ

	類型	円筒埴輪	共通・参考資料	各類型の特徴
二ツ塚古墳	A			・器高 50 ～ 55 cm、口径 30 ～ 40 cm、底径 25 cm 前後 ・4 条 5 段構成（2・4 段目に直交隔段穿孔） ・口縁端面にヨコハケ有・無と複数種あり ・突帯貼付：断続ナデ→（板オサエ）ヨコナデ（最下段は断続ナデ A・B の複数あり） ・突帯は上下に波打つ（突帯割付痕なし） ・基底部高：突帯間 = 1：1 が ・「基底部正立調整」（ナデ・指オサエ）
	B		 	・器高 70 cm 前後？、口径 35 cm 前後、底径不明 ・3 条 4 段構成か（口縁・基底部除き直交連段穿孔） ・口縁端面にヨコハケあり（須恵質） ・突帯貼付：指オサエ→ヨコナデ（断面台形） ・突帯は波打たない（突帯割付あり？） ・口縁高：突帯間 = 1：2 ・「基底部倒立調整」→正立（底面に置台痕）
三島神社古墳				・器高 50 cm 前後、口径 25 ～ 30 cm、底径 11 ～ 14 cm ・4 条 5 段構成（2・4 段目に直交隔段穿孔） ・外面板ナデ。口縁部直立と外反の複数種あり ・突帯貼付：断続ナデ→ヨコナデ（最下段は断続ナデ B）※僅かに A の個体あり ・突帯は上下に波打つ（突帯割付痕なし） ・基底部高 < 突帯間 ・「基底部倒立調整」→正立（※無調整も一部あり）
播磨塚天神山古墳	A			・器高 70 cm 前後、口径 30 ～ 35 cm、底径 20 ～ 25 cm ・4 条 5 段構成（口縁・基底部除き直交連段穿孔） ・口縁部にかけて直立 or やや外傾 ・口縁端外面に貼付突帯（強い指オサエ残る） ・突帯貼付：断続ナデ→ヨコナデ（断面三角形状） ・突帯は上下に波打つ個体あり（突帯割付痕なし） ・基底部高 ≤ 突帯間 ・「基底部正立調整」（ナデ・指オサエ）
	B		 	・器高 65 cm 前後、口径 30 ～ 35 cm、底径 20 ～ 23 cm ・4 条 5 段構成（2・4 段目に隔段穿孔） ・口縁端内面にヨコハケ有・無複数あり ・突帯貼付：断続ナデ→ヨコナデ（断面低めの M 字） ・突帯は上下に波打つ（突帯割付痕なし） ・基底部高 > 突帯間 ※大きく伸長化 ・「基底部倒立調整」（板・指オサエ複数段）→倒立した状態で乾燥させる為、底面尖り気味
鶴塚古墳				・器高推定 50 cm 程度？、口径 28 ～ 35 cm、底径 20 ～ 21 cm ・3 条 4 段構成か（口縁・基底部除き直交連段穿孔） ・口縁端内面に強めのヨコナデ ・口縁高：突帯間 = 1：1 程度 ・突帯貼付：断続ナデ→（板オサエ）ヨコナデ ・突帯は大きく波打たない（突帯割付痕は確認できず） ・「基底部正立調整」（ナデ・指オサエ）と ・「基底部倒立調整」→正立（底面に置台痕）の複数有 ・基底外面に布痕跡残る

0 50cm
(S=1:18)

第 33 図 松山平野における後期前方後円墳・円筒埴輪（比較）

採用しており、法量の差は墳丘規模に反映される部分があると考ええる。また、中・大型前方後円墳が独自で複数類型・規格の円筒埴輪を採用している点は注目すべきであろう。

次に特徴的な形状・技法面として、①口縁外端の貼付突帯、②突帯貼付の「断続ナデ技法 A・B」、③基底部調整の多様化と基底部高の変化の 3 点を中心に説明を加える。

まず、貼付突帯は播磨塚 A 類で採用しており、松山平野南部の土壇原 V 遺跡・円筒棺との比較から同一工人の製作を以前より指摘しているが、土壇原古墳群では 9 号墳（円墳・25 m）や 19 号墳（方墳・20 m）でも同様の貼付突帯を確認しており、近接するエリア内で異なる墳形・墳丘規模での出土という事実を基に、南接する「砥部窯跡群」での生産・供給を想定する。また、形象埴輪（盾形埴輪）基部の貼付突帯については、鶴塚古墳に程近いタンチ山古墳（詳細不明）からも鐘方分類の「a II・b II 類」に該当する個体が見つかっており、石見型埴輪の検討でも触れた播磨塚 A 類・貼付突帯口縁との共通項や、奈良盆地との製作技術上の情報共有についても興味深い事例である。

突帯貼付時の断続ナデについては、後期円筒埴輪の多くで採用されるが、二つ塚 B 類は須恵質で貼付時の上下波打ちが見られず、丁寧なヨコナデで最終調整されるため、同時期の円筒埴輪とは系統を異にする。加えて「口縁部高：突帯間 = 1 : 2」の規格性を有し、口縁端部内面にヨコハケを有するなど特徴的な一群である。基底部片を観察すると、倒立させ内面指オサエ・外面ナデ（ケズリ？）により薄く仕上げており、類似する土壇原 9 号墳では、基底面・外端にケズリや布目痕跡が残る。

最下段突帯にみられる「断続ナデ技法 B」は、三島神社と二つ塚 A 類で確認される特徴的な一群であるが、前者が断続ナデ貼付のみで終了する個体のみに対し、後者は断続ナデ貼付のみに加え、断続ナデ貼付→板オサエ（ナデ）整形を施す個体が混在する点で注目される。技法上は共通項を有しながらも、明らかに別集団による製作と捉えられる。なお、「断続ナデ技法 B」を有する資料は松山平野南部（砥部窯跡群および周辺の古墳）では現状確認されていないが、土壇原 8 号墳（円墳・16 m）の朝顔形埴輪・口縁部に連続押圧突帯が認められる点は注意を要する。

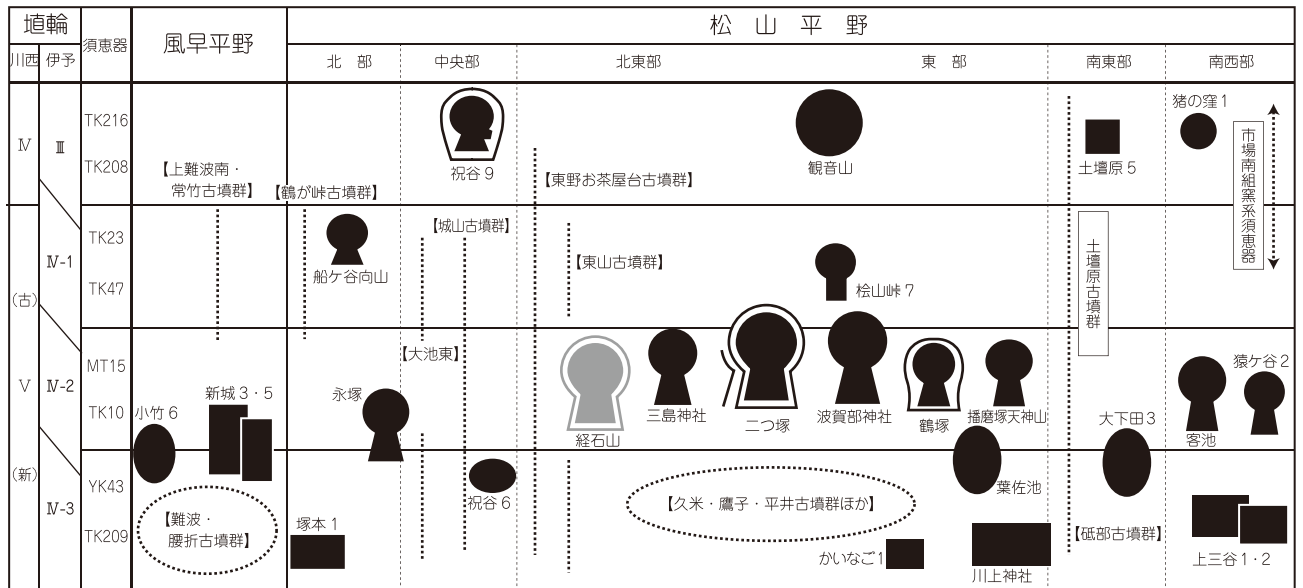
基底部調整については、「基底部高：突帯間 = 1 : 1」に近似する「正立調整」（二つ塚 A 類・播磨塚 A 類・鶴塚）と、基底部端が尖り気味の「倒立技法」（二つ塚 B 類・三島神社・播磨塚 B 類・鶴塚）に大別されるが、基底部が突帯間より低い個体（三島神社）や、大きく伸長化し基底端面が波打つ個体（播磨塚 B 類）など様々である。なお、基底部倒立調整の個体には、二つ塚 B 類・鶴塚・タンチ山古墳のように端部を細く仕上げるが底面には置台痕が明瞭に残るものがある。つまり、倒立調整終了後、①そのままの状態乾燥まで待つ、②再び正立状態に戻して乾燥させる、という幾つかのパターンを想定した上で個体を観察する必要がある。

3 松山平野東部の後期前方後円墳の展開とその評価

埋葬主体が不明ながら、鶴塚古墳の築造時期を円筒埴輪や石見型埴輪などの出土資料を基に 6 世紀前葉と位置付け、松山平野東部に展開する後期前方後円墳との比較検討を、主に円筒埴輪を素材として進めてきた。その結果、同時期の大・中型前方後円墳は複数類型の円筒埴輪が相互補完的に採用され、製作技法上の共通項と相違点を指摘した。さらに土壇原古墳群をはじめとした松山平野南部（砥部窯跡群）を拠点とした後期前方後円墳の埴輪生産・供給関係が抽出できる可能性を指摘した。

この「6 世紀前葉」（MT 15～TK 10）は、松山平野東部の中で規模の異なる前方後円墳が同時発生的に築造・展開される特異な状況を呈しており、第 34 図に古墳時代後半期の編年案を提示した。

まとめ



第 34 図 松山・風早平野における古墳後半期編年（案）

松山平野東部のように丘陵部から離れ平地部に築造される「独立型前方後円墳」の出現背景には、古墳時代中期より韓半島との交流を示す考古資料（韓式系土器・陶質土器等）の出土が多く、初期須恵器生産の先進的導入地域であった同平野が、倭王権中枢部にとって対韓半島における政治的拠点として重要視されていたことと大きく関係していたと推察される（山内 2023）。

鶴塚古墳で出土した石見型壙輪樹立の意義は、地域内の新興勢力の存在を示し、畿内をはじめ他地域の中小首長層との政治的関係性を反映している。また、前節にて明らかとなった後期前方後円墳の円筒壙輪・複数類型化と技法面での共通項は、廣瀬覚氏の指摘（廣瀬 2021）でもあるように、倭王権中枢部（奈良盆地）内の特定地域（生産地）ごとの繋がりの中でもたらされた、いわば「政治的産物」と捉えることもでき、群雄割拠の状況を呈する 6 世紀前葉の首長層の動態をよく表している。

6 世紀中葉以降、前方後円墳築造は停止し、被葬者の身分表象は墳丘から埋葬施設・副葬品へと変化していく。松山平野東部における後期前方後円墳の集中出現は、古墳時代後期の瀬戸内海を介した倭王権中枢部との強い紐帯を示すものとして評価できる。（山内英樹）

【参考文献】

鐘方正樹 2022 「近畿地方における V 期の円筒壙輪貼付突帯口縁と形象壙輪底部突帯」

『壙輪論叢』第 11 号 壙輪検討会

亀澤一平 2013 「装飾付須恵器の変化とその特色 - 壺系装飾付須恵器を中心に - 」

『平成 25 年度瀬戸内海考古学研究会 第 3 回公開大会』予稿集 瀬戸内海考古学研究会

廣瀬覚 2021 「6 世紀の壙輪生産からみた『部民制』の実証的研究」奈良文化財研究所

山内英樹 2008 「伊予の壙輪編年」『紀要愛媛』第 8 号（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

山内英樹 2022 「西部瀬戸内の石見型壙輪 - 松山平野の出土資料 - 」『壙輪論叢』第 11 号 壙輪検討会

山内英樹 2023 「松山平野における壙輪の展開」『壙輪からみた王権と社会』季刊考古学 163 雄山閣

和田一之輔 2006 「石見型壙輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』第 53 巻第 3 号、考古学研究会

※紙幅の都合上、各古墳出土壙輪の引用文献は割愛させて頂いた。

遺物観察表 - 凡例 -

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 (): 推定復元値

調整欄 土製品の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、口端→口縁端部、肩→肩部、頸→頸部、胴→胴部、
胴上→胴部上位、胴下→胴部下位、脚→脚部、底→底部、坏→坏部。

胎土欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金雲母、密→精製土、褐→褐色粒、黒→黒色粒、白
→白色粒、赤→赤色粒。

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1～3) →「1～3mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表 2 出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量 (cm)		形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 (mm) 焼成	備考	図版
					外面	内面				
1	土師器 甕	口径 残高	(20.0) 6.1	口縁部片。口縁部は外反して外上方にのびる。端部は内に肥厚する。	㊦ナデ ㊧マメツ	㊦ナデ ㊧ハケ目	灰白色土 7.5YR8/2 灰白色土 7.5YR8/1	石・長・黒・赤 (0.5～2)	須恵質・ 北側括れ 周壕部	
2	須恵器 坏身	口径 残高	(13.0) 4.8	たちあがりは内傾したのち上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	灰白色 10YR8/1 灰白色 10YR8/1	石・黒・赤 (0.5～2) ◎	北側括れ 周壕部	
3	須恵器 高坏	口径 残高	(11.1) 2.4	無蓋高坏の坏部。口縁端部は尖り気味。外面に斜線文が施される。	㊦ナデ ㊧マメツ自然釉	回転ナデ	灰白色 2.5Y7/1 黄灰色 2.5Y6/1	長・黒 (1～2.5) ◎	北側括れ 周壕部	
4	須恵器 高坏	残高	2.8	2方向のスカシ孔が施される。	回転ナデ	回転ナデ 自然釉	灰色 6N/ 灰色 7.5Y5/1	長・黒(1～2.5) 密 ◎	北側括れ 周壕部	
5	須恵器 高坏	残高	4.1	脚部と坏部の接合部片。脚部に2方向の長方形のスカシが施される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 N/0 灰色 N/0	石・長(0.5～2) 密 ◎	南側括れ 周壕部	
6	須恵器 高坏脚	残高	8.6	長脚1段スカシと考えられる脚部片。出土場所は異なるが7と同一個体とも考えられる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 N6/ 灰色 N6/	長(0.5～2) 密 ◎	前方部 西周壕	
7	須恵器 高坏脚	残高	8.6	長脚1段スカシと考えられる脚部片。6と同一個体か。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 N6/ 灰色 N6/	長(0.5～2) 密 ◎	北側括れ 周壕部	
8	須恵器 甕	口径 残高	(10.5) 2.6	甕の口縁部片。頸部と口縁部外面に波状文が施される。口縁端部内面に1条の沈線が巡る。	㊦回転ナデ ㊧波状紋 ㊨櫛描文	回転ナデ	明青灰色 5PB7/1 灰白色 2.5GY8/1	石・長・黒 (0.5～1.5) ◎	北側括れ 周壕部	
9	須恵器 壺	残高	3.5	口縁部は外に肥厚する。端面はやや丸味をもつ。外面は1条の凹線が巡る。凹線下に波状文が看取される。	回転ナデ、凹線	回転ナデ	灰色 N4/ 灰白色 N7/	長・黒(1) 密 ◎	北側括れ 周壕部	
10	須恵器 壺	口径 残高	(20.4) 4.3	口縁部は肥厚し内湾して立ち上がる。端面は平坦。外面に波状文を施す。	㊦回転ナデ ㊧→㊨波状紋、 凹線、回転ナデ	回転ナデ 自然釉	灰色 N5/ 灰色 N7/	長・黒(1) 密 ◎	北側括れ 周壕部	
11	須恵器 壺	口径 残高	(18.0) 4.1	口縁部は肥厚する。端部は尖り気味。文様帯には波状文が施される。	㊦ナデ ㊧→㊨波状紋、 凹線、回転ナデ	回転ナデ	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 N8/	石・長・黒 (1～3) ◎	北側括れ 周壕部	
12	須恵器 壺	口径 残高	(20.5) 10.4	口縁部は肥厚する。端部は丸味のある面をもつ。頸部外面には2条1対の凹線で区画された文様帯に波状文が施される。	㊧波状紋、凹線 ㊨回転ナデ	回転ナデ	灰白色 N7/ 灰白色 2.5Y7/1	長 (1～2) ◎	北側括れ 周壕部	6
13	須恵器 壺	口径 残高	(21.0) 14.7	2条1対の凹線で区画された文様帯には上から4段に波状文、最下段には櫛状工具による刺突文が施される。	㊨櫛描文、波状 紋、凹線 ㊨回転ナデ	㊨回転ナデ	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 5Y7/2	石・長・黒 (1～4) ◎	北側括れ 周壕部	6

遺物観察表

表 3 出土遺物観察表 土製品 (2)

番号	器種	法 量 (cm)		形 態・施 文	調 整		色 調 (外面) (内面)	胎 土 (mm) 焼 成	備 考	図版
					外 面	内 面				
14	須恵器 壺	残高	10.0	口縁部と底部は欠失。やや扁平な胴部。内外面にタタキ痕を僅かに残す。	㊦タタキ→カキ目	㊦当て具痕→回転ナデ、指オサエ	白灰色 N7/ 白灰色 N7/	長 (1~2) ◎	北側括れ 周壕部	6
15	須恵器 子壺	残高	7.1	子壺の口縁部は欠失する。肩は小さく張り出す。肩直下に波状文が施される。突帯外面には刻目が施される。	㊦→㊦ナデ、指オサエ	ナデ	灰白色 N8/ 灰白色 N8/	石・長・褐 (1~4) ◎	北側括れ 周壕部	6
16	須恵器 子壺	長さ	12.6	15 と同一個体。子壺の外面に僅かに波状文が看取される。	㊦ナデ	ナデ	灰白色 2.5Y8/1 灰白色 2.5Y8/1	長 (1~2) ◎	北側括れ 周壕部	
17	須恵器 子壺	残高	3.0	親壺に子壺は直接貼付される。接合部の破片で子壺の形態、施文とも不明。	㊦ナデ	ナデ、指オサエ	灰オリーブ色 7.5Y6/2 灰白色 N8/	長 (0.5~2) ◎	北側括れ 周壕部	
18	須恵器 器台	残高	7.8	器台の受部片。文様帯に波状文が施される。	㊦タタキ→カキ目	ナデ、当て具痕	灰白色 N7/ 灰白色 10YR7/1	◎	T7	
19	須恵器 子持壺 (親壺)	残高	6.0	底部片。底部外面に脚の接合痕が看取される。外面にはタタキ痕を残す。	㊦タタキ→回転ナデ、カキ目	ナデ、指オサエ	灰色 N6/ 白灰色 N7/	◎	T7	
20	須恵器 器台	残高	6.8	脚部片。文様帯に刺突文が施される。	㊦ナデ	回転ナデ	灰白色 N/ 灰白色 N/	◎		
21	須恵器 器台	残高	9.0	文様帯の上下に波状文を施す。盾列に長方形、三角形のスカシ孔を穿つ。	㊦カキ目、ナデ	回転ナデ	灰色 N7/ 灰色 N7/	◎		
22	須恵器 器台	残高	14.2	脚柱部の破片。2 状の凹線に区画された文様帯にはへう描き沈線文が波状に施される。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 N8/0	石・長・黒・赤 (0.5~2) ◎	T7	
23	須恵器 器台	残高	13.0	脚柱部の破片。2 状の凹線に区画された文様帯にはへう描き沈線文が施される。	回転ナデ	回転ナデ、粘土の巻き上げ痕を残す。	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 N7/	◎		
24	須恵器 器台	残高	11.2	脚柱部の破片。文様帯にはへう描き沈線文が施される。盾列に長方形のスカシ孔が穿たれる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 N6/ 灰色 N7/	◎		
25	須恵器 器台	残高	10.0	脚柱部の破片。文様帯にはへう描き沈線文が施される。盾列に長方形や円形のスカシ孔が穿たれる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 N7/ 灰色 N7/	◎		
26	須恵器 器台	残高	6.5	脚柱部の破片。文様帯には波状文が施される。盾列に三角形のスカシ孔が穿たれる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 N8/ 灰白色 N7/	◎		
27	須恵器 甕	残高	7.8	文様帯には波状文が施される。	回転ナデ	ヨコナデ	灰色 N6/ 褐灰色 10YR6/1	◎		

表 4 出土遺物観察表 土製品 (埴輪 1)

番号	埴輪 種類	焼 成	色 調 (外面) (内面)	法 量		形 状		基底部高 cm	調 整		備 考	図版
				測定部位	cm	口縁部	タガ					
28	円筒埴輪	須恵質	にぶい赤褐色 5YR5/3 にぶい橙色 5YR6/4	口縁部径 残高	(25.6) 5.8	—	—	—	外面 内面	ハケ目、ナデ ナデ	T4	
29	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 7.5YR7/6	口縁部径 残高	(29.2) 11.9	—	—	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	T4	
30	円筒埴輪	須恵質	明赤褐色 明褐色	口縁部径 残高	(35.4) 6.4	—	—	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
31	円筒埴輪	土師質 (硬質)	橙色 7.5YR7/6 黄橙色 7.5YR7/8	口縁部径 残高	(38.8) 11.2	—	—	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
32	円筒埴輪	土師質 (軟質)	黄橙色 10YR8/6 黄橙色 10YR8/6	口縁部径 残高	(35.0) 17.2	—	断面は低い台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	南側括れ部	
33	円筒埴輪	土師質 (硬質)	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	口縁部径 残高	(28.1) 17.3	中央凹み	断面は低い台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	T7	6
34	円筒埴輪	土師質 (硬質)	橙色 5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	口縁部径 残高	(28.1) 16.9	中央凹み	断面は低い台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	T7 北側括れ部	6
35	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 10YR7/4 にぶい橙色 10YR7/4	口縁部径 残高	(30.4) 20.2	中央凹み	断面は低い台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北西括れ部	6
36	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	口縁部径 残高	(31.2) 16.7	中央凹み	断面は低い台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	T7 穿孔	

鶴塚古墳

表5 出土遺物観察表 土製品 (埴輪 2)

番号	埴輪 種類	焼成	色調 (外面) (内面)	法 量		形 状		基底部高 cm	調 整		備 考	図版
				測定部位	cm	口縁部	タガ					
37	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 5YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	口縁部径 残高	(30.6) 17.8	—	台形、 低いM 字状	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北西括れ部	
38	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 7.5YR6/4 浅黄橙色 10YR8/4	筒部 残高	13.2	—	台形、 低いM 字状	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北西括れ部	
39	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 7.5YR6/4 にぶい橙色 7.5YR6/4	基底部径 残高	(19.5) 19.1	—	—	—	外面 内面	ナデ、布目痕 指オサエ、ナデ	北西括れ部	
40	円筒埴輪	土師質 (硬質)	橙色 7.5YR7/6 浅黄橙色 7.5YR8/6	口縁部 残高	14.1	—	台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	南西周壕	
41	円筒埴輪	土師質 (軟質)	淡黄色 2.5Y8/4 灰白色 2.5Y8/2	筒部 残高	9.5	—	台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ、マメツ 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
42	円筒埴輪	須恵質	橙色 2.5YR6/6 にぶい橙色 5YR6/4	筒部 残高	15.6	—	低い台 形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
43	円筒埴輪	須恵質	浅黄橙色 7.5YR8/6 にぶい橙色 7.5YR6/4	筒部 残高	12.4	—	台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	T4 (南括れ)	
44	円筒埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 10YR8/4 浅黄橙色 10YR8/3	筒部 残高	8.5	—	台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ ナデ	前方部西壁トレンチ。 円孔。	
45	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	残高	13.3	—	低い台 形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	T7。 円孔。	
46	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	残高	11.8	—	台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北西括れ部	
47	円筒埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/3 浅黄橙色 10YR8/4	残高	19.9	—	三角状	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	南側括れ部	
48	円筒埴輪	土師質 (硬質)	橙色 5YR7/6 橙色 5YR6/6	筒部 残高	13.3	—	台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	T7	
49	円筒埴輪	須恵質	にぶい黄橙色 10YR7/4 褐灰色 10YR6/1	筒部 残高	13.3	—	台形な いし三 角状	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	T5	
50	円筒埴輪	須恵質	にぶい橙色 5YR7/4 にぶい橙色 5YR6/4	筒部 残高	14.3	—	低い台 形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
51	円筒埴輪	須恵質	浅黄橙色 7.5YR8/3 にぶい黄橙色 10YR7/3	筒部 残高	10.0	—	台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ、マメツ 指オサエ、ナデ	T4 (南側括れ)	
52	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい黄橙色 10YR7/4 明黄褐色 10YR7/6	筒部 残高	14.2	—	低い三 角状	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	T7	
53	円筒埴輪	土師質 (硬質)	浅黄橙色 7.5YR8/6 淡橙色 5YR8/4	筒部 残高	13.8	—	台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	T7	
54	円筒埴輪	須恵質	明赤褐色 にぶい黄褐色	筒部 残高	12.9	—	台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
55	円筒埴輪	土師質 (硬質)	橙色 7.5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR7/4	筒部 残高	12.1	—	台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ、ヘラ記号 指オサエ、ナデ	T7 (北西括れ)	
56	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 7.5YR7/6	筒部 残高	8.4	—	低い三 角状	—	外面 内面	ハケ目、ナデ、ヘラ記号 指オサエ、ナデ	南東周壕	7
57	円筒埴輪	土師質 (硬質)	浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色 7.5YR8/6	基底部径 残高	(21.5) 11.8	—	—	(11.8)	外面 内面	工具痕、ナデ 指オサエ、ナデ	T4 (南側括れ)	6
58	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	基底部径 残高	(20.2) 8.3	—	—	(8.3)	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北側括れ部。 基底端部は先細る。	
59	円筒埴輪	土師質 (硬質)	浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色 7.5YR8/6	基底部 残高	9.8	—	—	(9.8)	外面 内面	ナデ、布目痕 指オサエ、ナデ	北側括れ部	6
60	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	基底部 残高	8.3	—	—	(8.3)	外面 内面	ナデ、布目痕 指オサエ、ナデ	T7。 底部は尖り気味外 面に布目痕。	
61	円筒埴輪	土師質 (硬質)	浅黄橙色 10YR8/4 黄橙色 10YR8/6	基底部 残高	10.9	—	—	(10.9)	外面 内面	ナデ、工具痕 指オサエ、ナデ	T7。 底部は丸味をもつ。	
62	円筒埴輪	須恵質	橙色 5YR6/6 にぶい橙色 7.5YR6/6	基底部 残高	9.7	—	—	(9.7)	外面 内面	ナデ、布目痕 指オサエ、ナデ	北側括れ部。 底部面にスノコ痕。	
63	円筒埴輪	須恵質	浅黄橙色 10YR8/3 灰白色 10YR8/2	基底部 残高	9.3	—	—	(9.3)	外面 内面	ナデ、工具痕 指オサエ、ナデ	北側括れ部	

遺物観察表

表6 出土遺物観察表 土製品 (埴輪 3)

番号	埴輪 種類	焼成	色調 (外面) (内面)	法 量		形 状		基底部高 cm	調 整	備 考	図版
				測定部位	cm	口縁部	タガ				
64	円筒埴輪	土師質 (硬質)	橙色 7.5YR6/6 にぶい橙色 7.5YR7/4	基底部 残高	7.5	—	—	(7.5)	外面 ナデ 内面 指オサエ、ナデ	T4 (南側括れ)	
65	円筒埴輪	土師質 (硬質)	黄橙色 10YR7/6 浅黄橙色 7.5YR8/4	基底部 残高	8.3	—	—	—	外面 ナデ 内面 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
66	円筒埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 5YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/3	基底部 残高	6.3	—	—	—	外面 ナデ、工具痕 内面 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
67	円筒埴輪	土師質 (硬質)	橙色 7.5YR7/6 浅黄橙色 7.5YR8/4	基底部 残高	9.2	—	—	—	外面 ナデ、ヘラ記号 内面 指オサエ、ナデ	後円部北東周壕	
68	円筒埴輪	土師質 (硬質)	浅黄橙色 10YR8/4 浅黄橙色 7.5YR8/4	基底部 残高	5.3	—	—	—	外面 ナデ、ヘラ記号 内面 指オサエ、ナデ	後円部北東周壕	
69	朝顔形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/3 にぶい橙色 5YR7/4	筒部 残高	8.6	—	台形	—	外面 指オサエ、ナデ 内面 ハケ目、指オサエ、ナデ	北側括れ部	
70	朝顔形埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 5YR7/4 橙色 7.5YR7/6	筒部 残高	8.5	—	台形	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 ハケ目、ナデ、指オサエ	T4 (南側括れ)	
71	朝顔形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色 7.5YR8/3	筒部 残高	6.4	—	台形	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 ナデ	北側括れ部	
72	朝顔形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/3 浅黄橙色 7.5YR8/4	筒部 残高	6.9	—	台形	—	外面 ナデ、ハケ目 内面 ナデ	北側括れ部	
73	朝顔形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/6 浅黄橙色 7.5YR8/3	筒部 残高	6.0	—	台形	—	外面 指オサエ、ナデ、ハケ目 内面 ハケ目、ナデ	北側括れ部	
74	盾形埴輪	土師質 (硬質)	淡橙色 5YR8/3 ～ 8/4 にぶい橙色 5YR7/4	残高	7.1	—	—	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
75	盾形埴輪	土師質 (硬質)	浅黄橙色 7.5YR8/6 浅黄橙色 7.5YR8/6	残高	8.6	—	—	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 指オサエ、ナデ	北西周壕	
76	盾形埴輪	土師質 (硬質)	浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色 7.5YR8/3	残高	14.0	—	—	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
77	盾形埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 5YR6/4 にぶい橙色 5YR7/6	残高	12.1	—	—	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
78	盾形埴輪	土師質 (硬質)	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	残高	15.8	—	—	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 指オサエ、ナデ	北側括れ部 T7 北西周壕	
79	盾形埴輪	土師質 (硬質)	にぶい黄橙色 10YR7/2 にぶい橙色 5YR6/4	残高	14.8	—	—	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
80	盾形埴輪	土師質 (硬質)	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 7.5YR7/6	残高	15.3	—	—	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
81	盾形埴輪	土師質 (硬質)	にぶい黄橙色 10YR7/4 橙色 5YR6/6	残高	16.2	—	—	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
82	盾形埴輪	土師質 (軟質)	橙色 7.5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR7/4	残高	10.2	—	—	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 ナデ	北西括れ部	
83	盾形埴輪	土師質 (軟質)	にぶい橙色 5YR7/4 浅黄橙色 7.5YR8/3	残高	11.0	—	—	—	外面 ハケ目、ナデ 内面 ナデ	北側括れ部	
84	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/4 にぶい褐色 7.5YR6/3	残高	9.7	—	—	—	外面 ナデ、マメツ 内面 ナデ	北側括れ部	
85	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 10YR8/4 橙色 7.5YR7/6	残高	8.5	—	—	—	外面 マメツ 内面 ナデ	北側括れ部	
86	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 10YR8/8	残高	11.2	—	—	—	外面 ハケ目、ナデ、線刻 内面 ナデ	北側括れ部	
87	盾形埴輪	土師質 (軟質)	淡橙色 5YR8/3 淡橙色 5YR8/3	残高	4.6	—	—	—	外面 ナデ、線刻 内面 ナデ	前方部西周壕	
88	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色 7.5YR8/3	残高	4.3	—	—	—	外面 ナデ、線刻 内面 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	
89	盾形埴輪	土師質 (軟質)	橙色 5YR7/6 浅黄橙色 7.5YR8/6	残高	6.8	—	—	—	外面 ナデ、線刻 内面 指オサエ、ナデ	前方部主軸トレンチ	7
90	盾形埴輪	土師質 (軟質)	灰白色 7.5YR8/2 浅黄橙色 7.5YR8/4	残高	4.6	—	—	—	外面 ナデ、線刻 内面 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	

鶴塚古墳

表 7 出土遺物観察表 土製品 (埴輪 4)

番号	埴輪 種類	焼成	色調 (外面) (内面)	法 量		形 状		基底部高 cm	調 整		備 考	図版
				測定部位	cm	口縁部	タガ					
91	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色 7.5YR8/4	残高	4.2	—	—	—	外面 内面	ナデ、線刻 ナデ	北側括れ部	
92	盾形埴輪	土師質 (軟質)	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	残高	4.8	—	—	—	外面 内面	ナデ、線刻 ナデ	前方部西周壕	
93	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 10YR8/4 浅黄橙色 10YR8/4	残高	5.1	—	—	—	外面 内面	ナデ、線刻、マメツ 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	
94	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 10YR8/4 灰白色 10YR8/2	残高	6.2	—	—	—	外面 内面	ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	
95	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色 7.5YR8/4	残高	17.7	—	—	—	外面 内面	指オサエ、ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	
96	盾形埴輪	土師質 (軟質)	にぶい黄橙色 10YR7/3 橙色 7.5YR7/6	残高	5.3	—	—	—	外面 内面	指オサエ、ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	
97	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/6 浅黄橙色 7.5YR8/4	残高	6.1	—	—	—	外面 内面	指オサエ、ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	
98	盾形埴輪	土師質 (軟質)	橙色 7.5YR7/6 浅黄橙色 7.5YR8/4	残高	7.0	—	—	—	外面 内面	指オサエ、ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	T4 (南側括れ)	
99	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/6 浅黄橙色 7.5YR8/4	残高	6.7	—	—	—	外面 内面	指オサエ、ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	
100	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/6 浅黄橙色 7.5YR8/6	残高	7.1	—	—	—	外面 内面	ハケ目、ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	T4 (南側括れ)	
101	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色 7.5YR8/4	残高	7.3	—	—	—	外面 内面	ハケ目、ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	
102	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/3 浅黄橙色 7.5YR8/4	残高	8.0	—	—	—	外面 内面	ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	北側括れ部	7
103	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/6 浅黄橙色 7.5YR8/4	残高	17.2	—	—	—	外面 内面	指オサエ、ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	7
104	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色 7.5YR8/4	残高	8.9	—	—	—	外面 内面	ハケ目、ナデ、線刻 指オサエ、ナデ、工具痕	北側括れ部	
105	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/6 浅黄橙色 7.5YR8/3	残高	15.5	—	—	—	外面 内面	ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	
106	盾形埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/4 灰白色 7.5YR8/1	残高	19.6	—	—	—	外面 内面	指オサエ、ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	前方部西周壕	
107	石見型埴輪	土師質 (硬質)	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	残高	18.4	—	—	—	外面 内面	ナデ、線刻、ケズリ 指オサエ、ナデ	北側括れ部	7
108	石見型埴輪	土師質 (硬質)	橙色 7.5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR6/4	残高	13.7	—	—	—	外面 内面	指オサエ、ナデ、線刻 指オサエ、ナデ、ケズリ	北側括れ部	7
109	石見型埴輪	土師質 (硬質)	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	残高	5.3	—	低い M 字状	(5.3)	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
110	石見型埴輪	土師質 (硬質)	橙色 5YR7/6 橙色 7.5YR6/6	残高	6.4	—	低い M 字状	(6.4)	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
111	石見型埴輪	土師質 (硬質)	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	残高	5.0	—	低い M 字状	(5.0)	外面 内面	ハケ目、ナデ ナデ	北側括れ部	
112	石見型埴輪	土師質 (硬質)	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	残高	6.2	—	低い M 字状	(6.2)	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
113	石見型埴輪	土師質 (軟質)	浅黄橙色 7.5YR8/6 にぶい橙色 5YR7/3	残高	13.2	—	—	(13.2)	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	北側括れ部	
114	形象埴輪 (馬?)	土師質 (軟質)	橙色 5YR7/8 橙色 7.5YR7/6	残高	8.2	—	—	—	外面 内面	ナデ 指オサエ、ナデ	前方部西周壕。 粘土帯貼り付け痕 有り。	
115	形象埴輪 (辻金具?)	土師質 (軟質)	黄橙色 7.5YR8/8 にぶい黄橙色 10YR7/4	残高	6.7	—	—	—	外面 内面	ナデ、線刻 指オサエ、ナデ	前方部西周壕。	7
116	形象埴輪	土師質 (軟質)	橙色 7.5YR7/6 黄橙色 7.5YR8/4	残高	4.8	—	—	—	外面 内面	ナデ ナデ	前方部主軸トレ ンチ	
117	形象埴輪	須恵質	にぶい橙色 5YR7/4 にぶい橙色 5YR6/4	残高	4.7	—	台形	—	外面 内面	ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ	後円部北東周壕	

遺物観察表

表 8 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	量 法 (cm)		形 態・施 文	調 整		色 調 (外面) (内面)	胎 土 (mm) 焼 成	備考	図版
					外 面	内 面				
118	甕	口径 器高 底径	20.8 31.8 (6.2)	口縁部は強く屈曲して開く。口縁端部は上方に肥厚し端面に1条の凹線を施す。底部はやや上げ底である。	㊦ナデ ㊦ナデ ㊦ハケ目、ミガキ	㊦ナデ ㊦ハケ、ケズリ、ナデ ㊦ナデ	鈍い黄橙色 10YR6/4 鈍い黄色 2.5Y6/4	石・長・黒・赤・金 (0.5~4) ◎	SD1 No.1	8
119	甕	口径 器高 底径	19.8 32.0 (6.2)	口縁端面は部分的に中央部が強いナデにより凹む。胴部最大径は胴上部で測る。底部は上げ底である。	㊦ナデ ㊦ミガキ ㊦ミガキ、ナデ	㊦ナデ ㊦ナデ、ケズリ ㊦ケズリ、ナデ	鈍い黄橙色 10YR6/4 鈍い黄橙色 10YR6/4	石・長・黒・赤 (0.5~4) ◎	南側 黒色土 A	8
120	甕	口径 残高	(15.5) 7.2	口縁部は内湾して短く立ち上がる。端部は丸く仕上げる。胴部の張りは弱い。	㊦ナデ ㊦ケズリ、ナデ	㊦ナデ ㊦ケズリ、ナデ	褐灰色 10YR4/1 にぶい橙 7.5YR7/4	石・長 (1~3) ◎	SD1 No.2	
121	甕	残高 底径	3.4 4.2	上げ底の底部。	㊦ナデ	㊦ナデ	にぶい赤褐色 5YR5/3 にぶい橙色 5YR6/4	石・長 (1~6) ◎	SD1 No.2	

表 9 黒色土出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	量 法 (cm)		形 態・施 文	調 整		色 調 (外面) (内面)	胎 土 (mm) 焼 成	備考	図版
					外 面	内 面				
122	甕	口径 器高 底径	27.2 40.0 9.45	口縁部は屈曲して短く外上方に開く。端部は面をもつ。頸部に刻目突帯文が施される。底部は上げ底である。	㊦ナデ ㊦ハケ目→ミガキ ㊦ミガキ	㊦ナデ ㊦ハケ目 ㊦ナデ、ミガキ	橙色 5YR6/6 橙色 5YR6/8	石・長(0.2~2) 黒・褐(0.1~0.2) ◎	黒色土 DE	8
123	甕	口径 器高 底径	22.3 35.7 6.6	口縁端部は上方に拡張し端面に2条の凹線文を施す。胴部は卵形を呈し、底部は薄い平底である。	㊦ナデ ㊦ハケ目 ㊦ヘラミガキ	㊦ナデ ㊦ハケ目 ㊦ナデ	橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	石・長(0.5~2) 金・黒(0.1~0.2) ◎	南側 黒色土 BC	8
124	甕	口径 残高	(20.0) 7.2	やや張りのある胴部。口縁部は短く大きく開く。端部は面をもつ。	㊦ナデ ㊦ナデ	㊦ナデ ㊦ナデ、剥離	明赤褐色 5YR5/8 橙色 5YR6/8	石・長 (1~2) ◎	南側 黒色土 C	
125	甕	口径 残高	(14.9) 10.7	口縁部は外上方にのびる。端部はやや肥厚する。肩部の張りは胴上位にもつ。	㊦ナデ ㊦ヘラミガキ	㊦ナデ ㊦ヘラミガキ	橙色 5YR6/6 にぶい赤褐色 5YR5/4	石・長 (1~2) ◎	T11T9 黒色土	8
126	甕	口径 器高 底径	14.3 23.7 5.6	長胴な胴部。口縁部は外反して外上方に開く。端部はやや肥厚する。底部は上げ底である。	㊦ナデ ㊦ナデ、ミガキ ㊦ミガキ、ナデ	㊦ナデ ㊦指オサエ、ナデ	橙色 5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	石・長・黒・赤・金 (0.5~3) ◎	南西部 黒色土	8
127	甕	口径 残高	(16.5) 3.6	大きく外傾する口縁部。端部は面をもつ。肩の張りは弱い。	㊦ナデ ㊦マメツ	㊦ナデ ㊦ミガキ	橙色 7.5YR6/6 にぶい橙色 7.5YR6/4	石・長 (1~3) ◎	南西 墳丘 黒色土	
128	甕	口径 残高	(15.2) 3.3	やや肥厚する口縁部。口縁端面は強いナデにより凹む。	㊦ナデ	㊦ナデ ㊦ナデ後ハケ	明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色 5YR5/8	石・長・金 (1~3) ◎	主軸 トレンチ	
129	甕	残高	3.0	短く外反する口縁部。口縁と胴部の接合部内面に稜をもつ。	㊦ナデ	㊦ナデ ㊦ミガキ	明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色 5YR5/6	石・長・赤 (1~3) ◎		
130	甕	残高 底径	15.7 5.9	口縁部は欠失。底部は平底である。	㊦ナデ ㊦ヘラミガキ	㊦ナデ、指頭痕 ㊦ナデ、指頭痕、ヘラミガキ	明赤褐色 5YR5/6 灰褐色 7.5YR4/2	石・長・黒(1~4) ◎	南側 黒色土	
131	甕	残高	6.2	頸部に貼付け突帯が巡る。	㊦貼付突帯 ㊦マメツ、ハケ	㊦工具による ハケ	にぶい黄橙色 10YR7/3 にぶい黄橙色 10YR7/4	長 (1) ○		8
132	甕	残高 底径	7.0 5.7	上げ底の底部。	㊦ナデ、ミガキ ㊦ナデ	㊦ナデ、指頭痕	橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	石・長(1~4) 赤・黒 ◎	黒色土 C・D	
133	甕	残高 底径	6.3 (6.5)	上げ底の底部。	㊦ヘラミガキ ㊦ハケ後ナデ指オサエ ㊦ハケ?	㊦ハケ目、マメツ	明褐色 5YR5/6 明褐色 5YR5/6	石・長・黒・金 (0.5~4) ◎	南西 墳丘 黒色土	
134	甕	残高 底径	3.2 (8.4)	やや上げ底の底部。	㊦ハケ目、指オサエ	㊦ナデ	にぶい橙色 7.5YR6/4 橙色 7.5YR6/6	石・長・黒 (0.5~3) ◎	不明	
135	甕	残高 底径	4.8 (6.3)	平底の底部。	㊦ヘラミガキ ㊦ナデ	㊦ナデ	にぶい黄橙色 10YR7/4 浅黄褐色 7.5YR8/3	石・長・黒・金 (1~2) ◎		
136	壺	口径 器高 底径	10.8 32.1 7.6	口縁端部は上下に肥厚し2条の凹線文を施す。胴部最大径を胴中位にもつ。平底の底部で焼成後の穿孔痕跡がみられる。	㊦ナデ ㊦ハケ目、横ナデ ㊦ヘラミガキ	㊦ナデ ㊦ナデ、指頭痕 ㊦ナデ	にぶい黄褐色 7.5YR7/4 橙色 5YR6/6	石・長(0.5~2) 黒・褐(0.1~0.2) ◎	南側 黒色土 C	9
137	壺	口径 残高	(10.5) 16.8	口縁端部は肥厚する。胴部最大径を中位にもつ。138は同一個体か。	㊦ナデ ㊦ミガキ、指頭痕	㊦ナデ ㊦ミガキ、指頭痕	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR7/4	石・長・赤 (1~2) ◎	主軸 トレンチ	9

鶴塚古墳

表 10 黒色土出土遺物観察表 土製品 (2)

番号	器種	法 量 (cm)		形 態・施 文	調 整		色 調 (外面) (内面)	胎 土 (mm) 焼 成	備考	図版
					外 面	内 面				
138	壺	残高 底径	17.3 (6.4)	上げ底の底部である。137 と同一個体か。	㊦ミガキ、ナデ ㊧ナデ、指頭痕	ナデ	にぶい黄橙色 10YR7/4 明黄褐色 10YR7/6	石・長・赤 (1~3) ◎	南側 主軸壁	
139	壺	口径 残高	12.9 6.9	外反気味に開く口縁部。口縁端部に2条の凹線を施す。140 と同一個体か。	㊦凹線文 ナデ	ナデ	黄橙色 10YR7/8 黄褐色 10YR7/8	石・長・褐 (1~3) ◎	主軸 トレンチ	9
140	壺	口径 器高 底径	13.2 (32.4) 8.0	口縁部は肥厚して端部外面に浅い2条の凹線を施す。胴部中央部と底部に焼成後の穿孔が施されている。	㊦ナデ ㊦ミガキ ㊦ハケ目	㊦ナデ ㊦ハケ→ナデ、指頭痕 ㊦ハケ目、ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/3	石・長・黒・赤 (0.5~3) ◎	器表面 マツ灰味	9
141	壺	残高 底径	30.7 8.2	口縁部は欠失する。胴部最大径を胴中位にもつ。底部は平底である。底部には焼成後の穿孔がみられる。	㊦ヘラミガキ ㊦ヘラミガキ	㊦ナデ ㊦ハケ目、ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4 橙 7.5YR7/6	石・長 (0.5~2) 金・褐 (0.1~0.2) ◎	南側 黒色土 D	9
142	台付 直口壺	口径 器高 底径	6.5 24.1 8.1	口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。胴部は算盤形を呈する。脚裾に小円孔を巡らす。	㊦ナデ ㊦ヘラミガキ ㊦ミガキ→ナデ	㊦ナデ ㊦ハケ目、ナデ ㊦ヘラケズリ	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	石・黒 (0.1~0.5) ◎	南側 黒色土 E	10
143	脚台付 注口土器	口径 残高	(30.8) 8.3	口縁端部は肥厚し、端部上面に4条の凹線文、体部上位には2条の刻み目突帯文、上下2段の鋸歯文を施す。	㊦㊦ヨコナデ ㊦ハケ、ナデ、 ミガキ	㊦ナデ ㊦ナデ ㊦ハケ、ナデ	浅黄橙色 10YR8/3 浅黄橙色 10YR8/4	石・長・黒・赤・ 褐・金 (0.2~1) 密 ◎	器面に 顔料?	10
144	脚台付 注口土器	口径 残高	(2.1) (3.9)	143 と同個体。注口部はやや上方に立ち上がる。突帯文の貼り付け部上面に竹管文が施される。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 10YR8/3 浅黄橙色 10YR8/4	石・長・黒・赤・ 褐・金 (0.5~2) 密 ◎	器面に 顔料?	10
145	脚台付 注口土器	残高	3.1	坏屈曲部の破片。	ナデ、ハケ目	ナデ	浅黄橙色 10YR8/4 にぶい橙 7.5YR7/4	石・長・金 (1~2) ◎		10
146	脚台付 注口土器	残高	8.3	柱部片。施文は上から多条沈線文、鋸歯文、円孔、綾杉文、円孔が施される。	ナデ	ケズリ、ナデ	浅黄橙色 10YR8/3 浅黄橙色 10YR8/4	石・長・黒・赤・ 褐・金 (0.5~2) 密 ◎	器面に 顔料?	10
147	脚台付 注口土器	底径 残高	(21.8) 9.5	底部片。裾端部は肥厚して3条の凹線を施す。外面にはヘラ描き沈線文、鋸歯文、円孔、綾杉文が施される。	ナデ、ヨコナデ	ケズリ、ナデ	浅黄橙色 10YR8/3 浅黄橙色 10YR8/4	石・長・黒・赤・ 褐・金 (0.5~2) 密 ◎	器面に 顔料?	10
148	鉢	口径 器高 底径	15.4 13.9 7.0	内湾して立ち上がる胴部。口縁部は外反して短く開く。口縁端部はナデにより肥厚する。底部は平底である。	㊦ナデ ㊦ハケ目 ㊦ハケ目、指頭痕	㊦ナデ ㊦ハケ目 ㊦ハケ目、指頭痕	橙色 5YR6/6 にぶい橙 10YR7/4	石・長・黒・赤 (0.5~4) ◎	主軸 トレンチ 黒	9
149	鉢	口径 残高	(16.2) 4.1	張りの弱い体部から短く開く口縁部。	㊦ナデ ㊦ナデ後ミガキ	㊦ナデ ㊦ミガキ	明褐色 2.5YR5/6 赤灰色 2.5YR4/1	石・長・金 (1) ◎	南西 墳丘	
150	鉢	残高 底径	2.7 3.8	上げ底の小さな底部。	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	淡黄 2.5Y8/4 黄褐色 2.5Y5/4	石・長 (1~5) ○	南東 黒色土	
151	高坏	口径 器高 底径	12.9 16.3 10.0	口縁部は内湾して立ち上がる。脚部と坏部の接合部外面に6~7条の沈線文、脚部に矢羽根スカシを施す。	㊦ハケ目 ㊦ヘラミガキ ㊦ヘラミガキ	㊦ヘラミガキ ㊦ヘラミガキ	橙色 5YR6/6 明赤褐色 5YR5/6	石・長 (0.2~2) ◎	T11 黒色土	9
152	脚	残高 底径	5.1 9.6	脚部片。外面に鋸歯文を施す。裾端部は面をもつ。	㊦ナデ	㊦ケズリ、ナデ	明赤褐色 5YR5/6 灰褐色 7.5YR4/2	石・長 (0.5~3) ◎	黒色土 F	10
153	縄文 深鉢	残高	5.2	口縁端から縦方向に2条の沈線が施される。	㊦キザミ目 ㊦ナデ、沈線文	ナデ	赤褐色 5YR4/6 赤褐色 5YR4/6	石・長 (0.1~2) ◎	出土地 不明	10

表 11 その他出土遺物観察表 石製品

番号	出土場所	器種	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
154	南側周溝 トレンチ	ナイフ形石器	緑色片岩	7.45	2.25	0.8	13.00		10

写真図版



1. 鶴塚古墳下層出土弥生土器①



2. 鶴塚古墳下層出土弥生土器②（脚台付注口土器）

鶴塚古墳

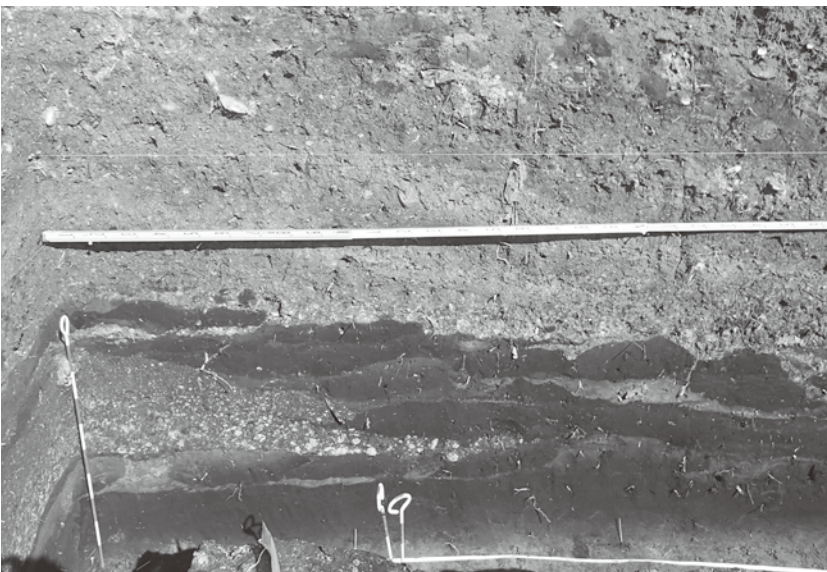
図
版
2



1. 調査前状況
(南より)



2. 後円部墳丘土層精査
状況(南西より)



3. 後円部墳丘土層近影
(西より)



1. 後円部墳丘ベルト土層
遠景（西より）



2. 北側括れ部周壕検出
状況（西より）



3. 前方部周壕内埴輪出土
状況（北より）

鶴塚古墳

図
版
4



1. 調査区全景①
(西より)



2. 調査区全景②
(真上より)



3. 前方部地山上面検出遺構
(西より)



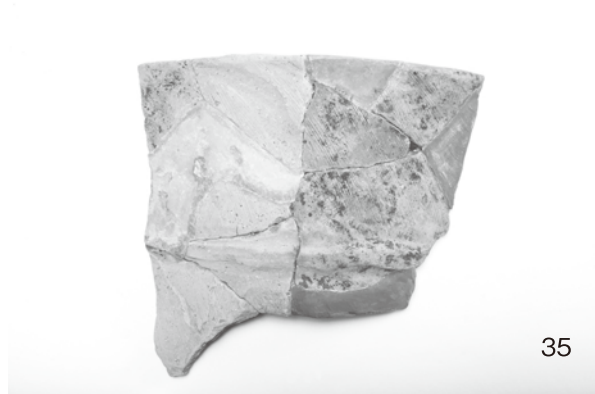
1. SK1 検出状況
(南西より)



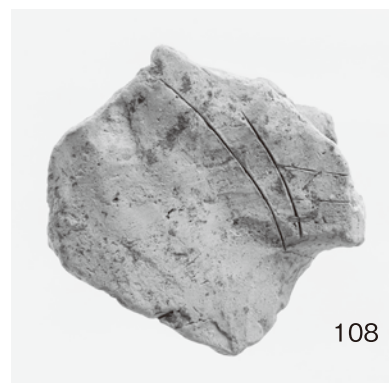
2. SD1 弥生土器出土状況
(東より)



3. 後円部黒色土中出土の
弥生土器(西より)



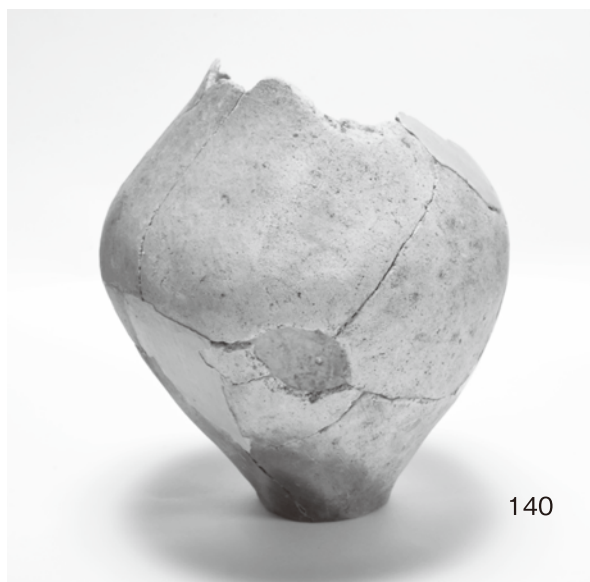
1. 出土遺物①（須恵器：12～15、円筒埴輪：33～35・57・59）



1. 出土遺物② (石見型埴輪：107・108、円筒埴輪 56、盾形埴輪：89・102・103、形象埴輪：115)



1. 出土遺物③ (SD1 : 118・119、黒色土 : 122・123・125・126・131)



1. 出土遺物④（黒色土）



1. 出土遺物⑤（黒色土：142～147・152、その他：153・154）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	つるつかこふん
書 名	鶴塚古墳
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 214 集
編 著 者 名	相原浩二 山内英樹
編 集 機 関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 791 - 8032 愛媛県松山市南斎院町乙 67 番地 6 TEL 089 - 923 - 6363
発 行 年 月 日	西暦 2025（令和 7）年 2 月 20 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つるつかこふん 鶴塚古墳	まつやましひらい 松山市平井町甲 3214 番及び甲 3209 番 3、甲 3211 番 8、甲 3213 番 7、 甲 3215 番 1、甲 3216 番 1 の各一部	38201		33°48'27"	132°49'10"	20180226 } 20180323	約 296	駐車場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鶴塚古墳	墳墓	古墳時代 弥生時代	古墳 土坑、溝		土師器、須恵器、埴輪 弥生土器、ナイフ形石器		前方後円墳。主体 部不明。周壕有り。	
要 約	鶴塚古墳は松山平野東部、小野川右岸に広がる標高約 52 ～ 53m の扇状地上に位置する。北側丘陵上には古墳時代中・後期の古墳が多数分布し、特に鶴塚古墳を含むエリアは播磨塚天神山古墳、波賀部神社古墳、二つ塚古墳など中・大型前方後円墳が集中する特異な地域である。 試掘及び部分的な本調査の結果、墳丘盛土及び埋葬主体部は後世の開墾等により大きく削平・消失していたものの、地山整形痕や全周する周壕の存在から、墳長 34.5m、周壕を含めると全長 40m を超える 6 世紀前葉の中型前方後円墳であることが判明した。また、黒色土包含層下の地山層では、弥生時代中期後葉の溝状遺構を検出することができた。 出土遺物としては周壕内より各種埴輪や須恵器が一定量出土しており、括れ部では装飾付須恵器や円筒・形象埴輪が出土した。特に「石見型埴輪」の出土は四国内では稀少で、木製品を除き列島最西端での出土であり、瀬戸内海を媒介とした王権中枢部との関係を窺い知る上で特筆される。また、黒色土包含層から出土した壺・甕・高坏のセットに加え、中国地方でみられる脚台付注口土器や台付直口壺は、瀬戸内海を越えた交流実態を示すものとして好資料である。 さらに、同平野東部における後期前方後円墳の円筒埴輪を比較・検討したところ、古墳ごとに多系統の円筒埴輪が存在することが再確認され、鶴塚古墳をはじめ同平野の後期有力首長層が王権中枢（奈良盆地）の各生産拠点と個別に繋がりを有していた可能性を指摘する。							

松山市文化財調査報告書 第214集

鶴 塚 古 墳

2025年2月20日 発行

編 集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー
〒791 - 8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923 - 6363

発 行 松山市教育委員会
〒790 - 0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL (089) 948 - 6605

印 刷 株式会社プロックス
〒791 - 3142 伊予郡松前町大字上高柳383-4
TEL (089) 985 - 3339
